

OVERSEAS DISPATCH REPORT

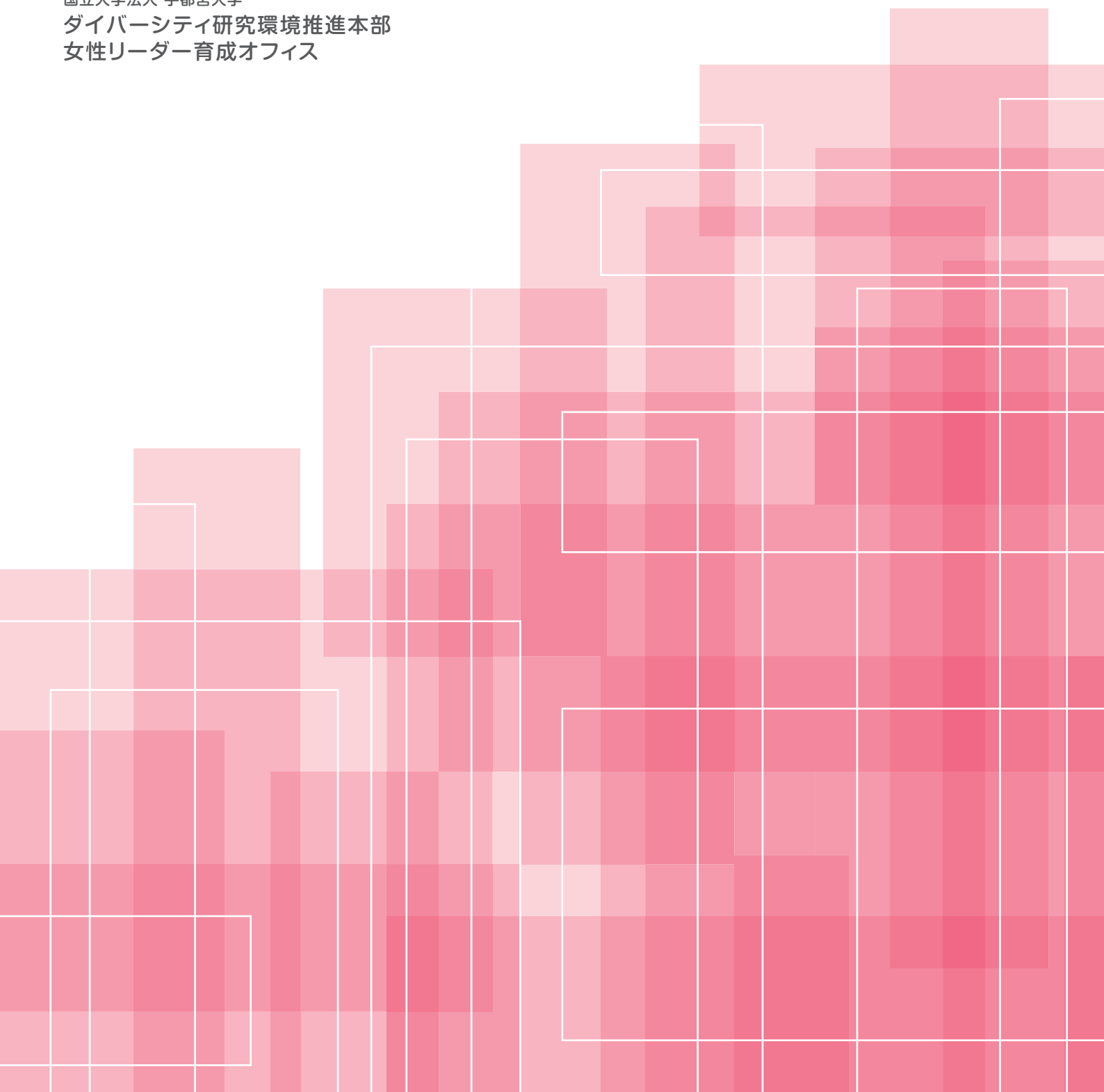
女性研究者海外派遣報告書

No.2

国立大学法人 宇都宮大学

ダイバーシティ研究環境推進本部

女性リーダー育成オフィス



◎ はじめに

宇都宮大学は、平成30年に文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に採択されました。本事業の特色は、海外留学等を通して研究力をつけた女性教員を積極的に上位職に登用することをめざす点にあり、本学では平成30年度に1名、令和元年度に10名の若手・中堅女性研究者の海外派遣を行い、令和2年度はオンラインにて7名を海外派遣いたしました。本報告書は、令和元年度派遣者のうち、令和2年1月以降に帰国された5名の方の報告を掲載しています。

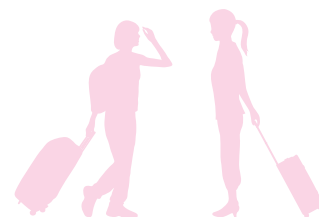
研究者にとって、ある程度まとまった期間海外で研究を行うことは、研究力向上やキャリアアップに有効であるだけでなく、異文化体験による視点や視野の広がり、海外ネットワークの構築など大きな意味があります。しかし、職場を離れることへの遠慮もあり、なかなか自分から言い出せず、特に長期の留学には躊躇する方も多いのではないのでしょうか。

本事業では、支援額に旅費、派遣先での研究費に加えて、派遣に伴う代替教員の人件費も含まれる、という手厚い支援体制となっており、このことにより潜在的に要望を持っておられた多くの女性教員の留学が実現しました。

帰国後には、報告会を行って若い世代への波及効果を与えると同時に、新たに開発するキャリアパスプログラムを実施して、女性教員がライフステージに応じて個性と能力が存分に発揮でき、優れたリーダーが一人でも多く誕生してくれることを期待しています。

ダイバーシティ研究環境推進本部長 藤井 佐知子

INDEX



2 丁 貴連

国際学部・国際学科・教授



アメリカ

8 長谷川 万由美

共同教育学部・教授



イギリス

12 飯塚 明子

留学生・国際交流センター・助教



アメリカ

16 金子 亜美

国際学部・国際学科・助教



アメリカ

18 阪本 公美子

国際学部・准教授



タンザニア

22 海外派遣研究成果報告会



24 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業(先端型)活動報告



※所属・職位については、留学時点のものです。



丁貴連

ちよん きりょん

国際学部・国際学科・教授



派遣先機関

Harvard University Library
(ハーバード大学図書館)

住所

1 Harvard Yard, Cambridge, MA 02138 USA

派遣先期間

第1回目：令和1年8月10日～9月28日
第2回目：令和2年2月20日～3月25日

研究テーマ

有島武郎とアメリカ留学—思想的転換点となった1900年代初頭のハーバード大学とその時代

◎ 海外派遣制度を利用してよかったこと

今回の派遣では多くの成果を上げることができたが、中でも有島武郎の社会主義思想に大きな影響を及ぼした金子喜一のハーバード大学大学院時代の学籍簿（原簿）を入手できたことはいくら強調してもいいことはない。なぜなら、この資料にはこれまでに明らかにされてこなかったハーバード大学における金子の動静は無論、有島との交流を知る上で逸することのできない極めて重要な基礎データが記されているからだ。しかも、それを村上春樹の翻訳者として世界的にその名を知られるハーバード大学名誉教授Jay Rubin先生から、「I have never used these materials but perhaps the attached scans would be of some use to you in your research, especially the Graduate School Records of Arishima Takeo and Kaneko Kiichi (2020/9/21)」という励ましのお言葉と共に提供されたのである。故栗田廣美教授をはじめとする有島及び金子研究者たちが探してやまなかった学籍簿を自分の目で確かめた時にはさすがに興奮した。がしかし、日本でもアメリカでも公開されたことのないこの貴重な資料を惜しみなく提供してくださったルービン先生の思いを推し量ると、喜んでばかりはいられなかった。

そこで、先生の期待に応えるべく2回目の派遣では有島と金子に加え、さらに有島のフェミニズムの考え方に影響を及ぼした金子婦人ジョセフィン・コンガーについて調査を行なうことにした。幸いに、ハーバード大学図書館には金子とコンガーが発行ないし関わっていた*The Socialist Woman*・*The Progressive Woman*・*The Coming Nation*（シュレジンガー図書館所蔵）、*The Apple Reason*・*Chicago Daily Socialist*（ラモント図書館所蔵）、*The Arena*（ボストン公共図書館所蔵）など20世紀初頭のアメリカで発行されていた社会主義関連雑誌と新聞が所蔵されていた。コロナの影響で一部しか閲覧できなかったが、持ち帰った資料を整理しながら、ハーバード大学を派遣先にしてよかったなと改めて思うのは、ワイドナー記念図書館を中心に70余りある同大学図書館の充実ぶりである。ハーバード・イェンチン図書館、ピュゼイ図書館文書館、ホートン貴重書図書館などもよく利用したが、いずれの図書館から充実かつ温かいサポートを受けたおかげで、有島にとって思想的転換点となった1900年代初頭のハーバード大学とその時代を浮き彫りにすることができた。その過程で有島の社会主義とフェミニズムの起源に迫ることができたことは望外の喜びである。



図1 学術図書館として世界最大級の蔵書を誇るワイドナー記念図書館。(2020/9/5撮影)



図2 ワイドナー記念図書館のメインリーディングルーム。学期中は無論休みの間でも図書館には夜遅くまで勉強する学生で溢れていた。(2020/3/5撮影)



図3 東アジア学に特化したハーバード・イェンチン図書館。中国語・日本語・韓国語図書約150万冊所蔵。他に定期刊行物、写本や版本、軸、絵巻など貴重書多数所蔵(2020/3/21撮影)

◎ 派遣先での苦労

私は、本調査に先立つ2016年6月1日から2017年1月31日までの8ヶ月間客員研究員として、米国コロンビア大学東アジア言語文化学部(The Department of East Asian Languages and Cultures, Columbia University)に滞在し、アメリカ留学時代の有島武郎の足跡をたどった。実は、その際に数回にわたってハーバード大学に出かけ、ハーバード・イェンチン図書館、ライシャワー日本研究所、The Graduate School of Arts and Sciences事務室の世話になっていた。そのおかげで、今回の派遣調査では生活や研究の面は無論、大学ともスムーズな関係を築くことができた。だからこそ残念に思うのは、当初希望していた長期滞在が認められなかったがために、楽しみにしていた授業の聴講(少なくとも1セメスター以上滞在期間必要)が全くできなかったことだ。私の専門分野は比較文学、特に西欧近代文学の影響を強く受けた日本の近代文学が韓国や中国、台湾といった東アジア地域の近代文学の成立に及ぼした影響と受容について研究を行なっている。また、2011年度から国際学部専門科目「ジェンダー論」(オムニパス授業、2018年度より代表教員)を担当している関係で、卒論や修論、博論でジェンダーやセクシュアリティ、フェミニズムを取り上げるゼミ生が年々増え、その指導の一環としてジェンダー研究にも取り組んでいる。

そこで、ハーバード大学に派遣中はアメリカでも有数な女性学関係のコレクションを所蔵するRadcliffe Institute for Advanced Study付属Schlesinger Libraryが進めているジェンダー平等の取り組みを調べると共に、東アジア(日本、中国、韓国、台湾)の文学と文化を専門とするKaren L. Thornber教授の授業と東アジア文明学部が提供するジェンダー関連授業を聴講し、自分の研究と教育、特に論文指導の参考にしたいと聴講計画を立てていたのである。そのチャンスを逃してしまった悔みは大きい、充実感の方も大きい。なぜなら、韓国研究所が主催した歓迎パーティで知り合ったNamhi Kim Wagner(元ハーバード大学韓国語講師)氏を通じて「文部省雇米国人フェノロサ叙勲の件」の調査を行なっているEllen P. Conantさんの研究を手伝ったことからボストン米韓芸術協会(Korea Cultural Society of Boston)のByung Kim(University of Massachusetts Lowell)教授から同協会での講演「ボストン美術館と日本、そして有島武郎」を依頼されたこと(残念ながらコロナで中止)、Ralph Waldo Emerson Houseでは逆取材を受けるなど、研究や授業では得られない有意義な交流ができたからである。



図4 ラドクリフ高等研究所付属シュレジンガー図書館。アメリカでも有数な女性学関係のコレクションを所蔵している。



図5 ラドクリフ研究所のヘレン・ケラーポスターの前で。彼女は同研究所の前身Radcliffe Collegeを1904年卒業し、男女同権論者として婦人参政権運動を行っていた。(2020/3/2撮影)



図6 シュレジンガー図書館所蔵「プログレッシブ・ウーマン」32号に掲載された金子喜一とコンガー婦人。1909年5月24日金子は結核療養のため日本に帰国したが、本写真は出発2時間前の編集室で撮られたものである。

◎ 海外派遣を通して、自身に起きた変化や気づき

今回の派遣では、調査・研究の傍らライシャワー日本研究所や韓国研究所、アジアセンターといったハーバード大学研究機関が開催するセミナーに出席し、他ジャンルの日本人研究者と留学生、米国の日本(韓国、中国)文学研究者との交流を通じて、日本文学研究とは何か、東アジアという文脈において自分の研究がいかなる意義を持ち得るか、ということについて外側から見つめ直す機会となった。下のポスターは、派遣中に開催されたセミナーの一部である。コロナの影響で3月13日以降の講演はすべてキャンセルとなったが、これらのセミナーでは米国内外から学者や専門家、若手の研究者が講師として招かれて東アジアの社会・歴史・文化の諸問題について発表し、出席者と活発な議論が行われた。出席者の多くはその分野に関心のある教員と学生であったが、とりわけ印象深かったのは、大学院生たちが授業や研究の合間を縫って専門は無論、専門外のセミナー(シンポジウムや著名人による講演会など)にも積極的に出席し、東アジア研究の最先端に触れていたことだ。時折ほっとするような基本的な質問をする院生もいたが、「良く分からない」にもかかわらずセンスのいい効果的な質問ができるのは、日本とは違う教育の成果なのだと改めて思った。3ヶ月足らずの限られた時間ではあったが、本派遣では自分の研究についてだけでなく、セミナーなど授業以外の場で研究のセンスを磨いているハーバード大学の院生たちとの交流を通して、宇都宮大学における大学院教育の在り方についてもいろいろと考えさせられる契機となった。そのような貴重な時間を与えていただいたダイバーシティ研究環境推進本部に改めてお礼を申し上げたい。



図7 韓国研究所開催 2019/9/26



図8 ハーバード仏教研究フォーラム・韓国研究所共催「Prayers for Divine Protection」セミナー風景 (2020/2/25撮影)



図9 アジアセンター・韓国研究所・ライシャワー日本研究所共催 2020/3/2



図10 ライシャワー日本研究所・韓国研究所・ウェザ・ヘッドセンター研究所共催 2020/3/13(中止)

◎ これからの目標

本派遣調査では、散逸されたと言われていた金子喜一の大学院学籍簿の原簿を入手できたことを皮切りに、有島のフェミニズムの起源に金子喜一とその妻ジョセフィン・コンガーが深く関わっていたこと、有島のフェミニズムの考え方についてはコンガーからの影響が大きかったこと。そして、このフェミニズムの考え方の影響は、有島の文学作品に反映されていたという事実を浮き彫りにするなど、思わぬ発見がいくつもあった。その成果はこれから順次発表してゆく予定であるが、できればアメリカの学会誌にも発表し、日本語の論文をあまり読まず、英語論文で間に合わせようとする最近のアメリカの日本文学研究者に向けて日本文学の面白さを伝えたい。

◎ 将来留学を考えている人へのメッセージ

短期・長期を問わず在外研究は、自分の研究を外から見つめ直す良い機会である。言葉の問題や積み残した仕事、派遣先での生活など、さまざまな懸念は「さながら捨つべきなり」。思い切って出かけてみれば、得られるものは期待以上に多いはずだ。

派遣先から先生へ

I am attaching two scans here and will send two more scans in a separate email. I have never used these materials to you in your research, especially the Graduate School Records of Arishima Takeo and Kaneko Kiichi. I hope your work has gone well in Cambridge. Have a safe trip to back to Japan. Please feel free to write to me in Japanese. (Jay Rubin:ハーバード大学名誉教授・日本文学研究者・日本文学翻訳家)

有島武郎の足跡を訪ねて

ー思想的転換点となった1900年代初頭のハーバード大学とその時代ー

丁貴連(教授)

JEONG Gwiryun, Ph.D.

宇都宮大学 国際学部

jeong@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

「アジアの欠落」が指摘される有島武郎(1878~1923)の作品が、魯迅や金東仁、廉想渉といった20世紀初頭の東アジア知識人たちの間で広くかつ深く読まれていたのはなぜか。筆者はその背景に有島のアメリカ留学(1903年8月~1906年8月)が深く関わっていると思い、4年前の2016年、サバティカル(コロンビア大学東アジア言語文化学部客員研究員:2016年6月1日~2017年1月30日)を利用してアメリカ留学時代の有島の足跡を調査した。しかし残念ながら、この調査では「ペンシルベニア時代とハヴァフォード大学」、「ニューイングランド時代とハーバード大学」、そして「ワシントン時代と議会図書館」の3期に分けられる有島のアメリカ留学生活のうち第1期と第3期の足跡を辿るにとどまり、第2期の調査は時間と費用の問題で次回に譲った。問題は、この時期に有島は思想的転換点を迎えていたということだ。その転換点とは、ハーバードで出会った在米社会主義者の金子喜一(1875~1909)とその妻ジョセフィン・コンガー(1874~1931)、そして弁護士ピーボディー(1862~1938)らとの交流を通して、後に有島の文学と生き方に重要な意味を持つこととなった社会主義や無政府主義、フェミニズム、ホイットマンなどに接近していったことである。だからこそもっと時間をかけて徹底的に調査せねばならないと思ったわけだが、当初の計画通りには進まず、気が付けば研究最終年度を迎え、ハーバード大学を優先しなかった自分を責めながら、最終報告書の執筆に取り掛かっていた。そんな矢先に、宇都宮大学女性教員海外派遣制度による2019年度海外派遣者に選ばれ、悔みを残したまま中断を余儀なくされていたハーバード大学時代の有島の足跡を調査する道が開かれたのである。期待していた長期ではなく、夏休みと春休みを使わねばならないという短期滞在となり、フィールドワーク中心の計画に切り替えなければならなかったものの、諦めかけていた再調査の機会を与えてくれた宇都宮大学ダイバーシティ研究環境推進本部に感謝しつつ、2回にわたる調査を無事終えることができた。

2. 派遣先と派遣期間

派遣期間: 第1回目: 令和元年8月10日~9月28日(48日間)

第2回目: 令和2年2月20日~3月25日(35日間)

国・派遣先機関: アメリカ・ハーバード大学図書館(Harvard University Library)

有島のアメリカ体験、とりわけ思想的転換を果たす場となったハーバード大学時代の体験を考察するための「基礎作り」を目指す本調査では、同大学院在学時の有島の姿を再現する上で、「学籍簿(原簿)」や「ハーバード大学カタログ」(1904-05年度版)、『歴史学・政治学ディヴィジョン便覧』(同年度版)、『ハーバード大学公式記録・ハーバードカレッジ学長・出納役報告書』(同年度版)などの閲覧と分析、考察は欠かせない。そこで、2回にわたる派遣期間中はハーバード・イェンチン図書館を拠点に、ピュゼイ図書館文書館やホートン貴重書図書館、ワイドナー記念図書館、シュレジンガー図書館といったハーバード大学図書館とケンブリッジ公共図書館、ボストン公共図書館、そしてニューハンプシャー州グリーンランドのウィクス公共図書館(Weeks Public Library)で調査を行なった。特に、ピュゼイ図書館文書館の協力を得て、有島武郎の学籍簿の原簿を閲覧することができたことは、今後の有島研究を続けていく上で大きな励みとなった。マックヴェイ山田久仁子氏をはじめとするハーバード大学図書館とケンブリッジ公共図書館、ボストン公共図書館、ウィクス公立図書館のスタッフには大変お世話になった。心からお礼を申し上げたい。

3. 調査概要

本調査では、有島が書き残した日記と手紙、作品(『迷路』1918、『リビングストーン伝』第四版序言)1919、『ホイットマンの一断面』1913、『ホイットマンに就いて』1920)などを手掛かりに、ハーバード時代の有島の足跡を可能な限り正確に追い、有島にとって思想的転換点となった1900年代初頭のハーバード大学とその時代に迫ることができた。成果はこれから順次形にしていこう予定であるが、本報告書ではそのポイントとなる出来事を紹介したい。

1) ハヴァフォード大学からハーバード大学へ

1904年6月10日、ハヴァフォード大学(Haverford College)でM・Aの学位を取得した有島は、次の留学先としてハーバード大学を選んだ。家族に送った書簡には、「同校はご存じの如く米国二大々学の一にして規模の大ききと経歴の古きとは一年の遊学に値す」(04/7/14-15)とその理由が述べられている。実際、有島が転学を希望した1904年当時のハーバード大学は、1869年から40年間にわたって学長を務めたチャールズ・W・エリオットの下で自由選択科目制の導入など劇的な改革が行われた。その結果、ハーバード大学はニューイングランド地方の「ガレッジ」から全米を代表する高等教育機関、すなわち専門的学問研究機関としての機能を持つドイツ型の「ユニバシティ」として名声を高めていたのである。『ハーバード大学カタログ』(1904-05年度版)によれば、有島在学時点で、学生はすでに4000人(研究者を含む教員総数525人)を超え、出身地も全米・全世界に広がっていた。留学生など「珍しくも何となく、はるばる日本からも松方伯爵の息子[松方君ヲ始メトシ岩崎本家ノ息子福澤先生ノ息子名古屋豪商八木ト申候ノ人ノ息子]など「十一人」が留学していた。またケンブリッジ、ボストン、あるいはその周辺はロングフェローやエマソン、ソロー、ホーソンなどアメリカを代表する多くの文筆家を生んだ、いわば文化的な雰囲気漂う地域でもあった。1学年僅か30人(総学生数130人)にしかない田舎の宗教大学に物足りなさを感じていた有島は、学問的にも文化的にも知的刺激に満ちていたハーバード大学で様々な方面に関心を拡大していくことになる。



図1 有島が在学したThe Graduate School of Arts and Sciences。当時GSAは全米化・国際化が進み、11名の日本人留学生在学していた。(2019/8/20撮影)



図2 チャールズ・W・エリオット学長はハーバードを世界的クラスの大学へと引き上げた。



図3 詩人ロングフェロー館(105 Brattle St.)。近くにはロングフェローとエマソンの友人で詩人であるローウェルの生家(33 Elmwood Avenue)もある。(2020/3/1撮影)

2) 大・大学で学ぶ

●「一帯ノatmosphere何となく人ニ学問ヲ勧ムル様ナリ」

9月26日、ボストンに着いた有島は、友人の友人たちを頼りにして翌日27日にケンブリッジ中心部の一等地に位置したカーランド・プレイス12番地に下宿を取った。当時、ケンブリッジ市内には路面電車が走っていたが、この下宿は電車道から離れた行き止まりの袋道、しかもその一番奥の突き当りの

右にあった。有島は、「袋道ナレバ人ノ往来甚稀ニ、電車ノイマハシキ音モ聞エズ」(D.04/9/27)、「楡の黄葉美しく札幌など思ひ起し」(L.04/10.27-11/17)、「Memorial Hallと申候共同食堂ノ大時計の声風ノ向キニテハハッキリ聞エ」(L.04/12/13)る下宿の静かな環境と共に、「人ニ学問ヲ勤ムル様ナ」(D.04/9/27)町の雰囲気を楽しんだ。



図4 ハーバード前半の下宿。有島は一階左の部屋に居住。その生活は「故国ニテハ為シ得ヌ餐沢」なものであった。(2019/8/15撮影)



図5 メモリアルホールの時計塔。但し時計は1956年火災で焼失。(2019/9/9撮影)



図6 有島がよく食事をとっていたメモリアルホールの食堂(Dining Hall)(2019/9/9撮影)

●「大学ノ講義ト申候而モサシタル事ハ無」

ケンブリッジに到着した2日後の29日、有島はThe Graduate School of Arts and Sciences事務所に申出かけて入学手続きをし、ハヴァフォード大学で受けていた歴史と労働問題に加え、さらに美術と宗教史を受講することにした。特にこの2つの科目については、「異常ニ興味ヲ以テソラ聞キヌ」(D.04/9/30)と記されている。ただし恩師の宮部金吾への手紙に書くように、有島は「此処では別にdegreeを取らんと心の御座なく候間気儘に好めるcourseを取り居申候」(04/10/27-11/17)という姿勢をとっていた。そのせいもあろうが、早々に授業をサボった有島は、受講していた科目ですら試験を受けず、結局は単位取得そのものを完全放棄している。だからといって、何もなかったというわけではない。大学の講義よりも「図書館ノ勉強方遙カニ補益アル様思ハレ」ていた有島は、「其方ニカヲ入レ」ていた。有島がよく利用していたのは【図7】のGore Library、いわゆる中央図書館である。1838年41,000冊で開館した本図書館は、その後急速な発展を遂げ、19世紀末には全米3番目規模の大図書館となった。ちょうどその頃ハーバードに入学した有島は、中央図書館は無論下宿近くの神学校図書館やケンブリッジ公共図書館にも足を延ばして、日本の『六合雑誌』をはじめとする世界中から届けられた新着の雑誌を「彼是涉獵」し「頭脳ニ収め得」(L.05/7/2-7)ていたのである。



図7 有島が足繁く通った旧中央図書館。ワイドナー記念図書館設立のために1913年に取壊された。



図8 ケンブリッジ公共図書館。有島はここでゴースキーやシェンキエヴィチの作品に出会った。(2020/3/6撮影)



図9 ドイツの文豪シーラーの没後百年記念シンポジウムが開催されたフォグ美術館。有島は金子と出席している。(2020/3/6撮影)

●「此地に一ノ特色ハ世界的二名を知らレタル名士ノ来遊スル」ニ御座候」

無論、一日中図書館で書物と首肯していたわけではない。有島は学内外で開催されていた講演会やシンポジウム、楽劇、社会主義者集会などに出席して「見聞ノ知識」を広めていた。エリオット学長が行なった改革の一つに、外部から名声の高い研究者を招集したことが挙げられている。有島が在学していた当時も、その一環として「Gladstone伝ノ著者トシテ特ニ日本人ニハ知らレタルモーレー氏」、「『羅馬帝国』『米国歌』ノ著者トシテ博士ノ名アルBrice氏」、「其他インドノ大説教家某」(L.04/12/13)ら著名人が「踵を接シテ」ハーバードを訪れて講演を行なった。有島は「愉快」にさせたこの講演会は、現在もハーバード大学の各研究機関で毎日のように開催されている。

3) エマソンゆかりの地・コンコードを訪れる

授業が始まってから2週間ほど経った10月16日、有島は藤岡という友人と「Emersonノ故地探ラン」とコンコードに出かけた。ケンブリッジから電車で40分ほどかかるこの地は、アメリカ独立戦争の発祥の地であり、エマソンやホーソン、ソロー、オルコットといった19世紀アメリカ文学を代表する文人たちが多く住んだ旧跡でもある。中でも、コンコードの賢者と呼ばれたエマソンは、*Nature*(1836)を皮切りに*The American Scholar*(1837)、*Divinity College Address*(1838)、*Essays*(1841,1844)、*The Transcendentalist*(1842)といったアメリカの知的文化を先導する作品を次々と発表し、同時代のアメリカは無論、北村透谷や徳富蘇峰、内村鑑三、国木田独步、岩野泡鳴のような明治期の日本の文学者にも大きな影響を及ぼしていた。その一人徳富蘇峰は、1895年欧州視察の際にエマソンの面影を求めてわざわざコンコードを訪れるほどエマソンに心酔したが、ハーバードに着いた有島も先人に見習ってコンコード詣でを行っていたのであろう。この旅行後、有島は「自然論」をはじめとするエマソンの作品と評論(John Morley, *Ralph Waldo Emerson*, 1884:出版年度など筆者確認)、そして伝記(Elisabeth Cary Luther, *Emerson, Poet and Thinker*, 1904:出版年度など筆者確認)などを読んだ。エマソンだけではない。ハーバードに移ってからの有島は「渴スルモノハ如ク」シーラーやゴースキー、プランデス、ホイットマンなど独逸文学及び北欧文学、さらには同時代のアメリカ文学を読み漁りながら文学や哲学への関心を深めていった。



図10 有島がスケッチした115年前の姿のままのエマソン館。ソローやホーソン、オルコット父娘がこの家に集まって親交を深めていた。(2019/9/20撮影)



図11 エマソン館(Ralph Waldo Emerson House)を訪れた日の有島の日記(1904年10月16日)



図12 エマソンとその妻が眠るスリーピ・ホロー墓地。他にもホーソン、ソロー、オルコット一家が葬られている。(2019/9/20撮影)

4) 「空白の3ヶ月」と社会主義思想への接近

ただ同時に、有島はエンゲルスやカウツキー、シェーフェルなどの社会主義者の書物も読んでいた。その社会主義を有島に吹き込んだのは他ならぬ同時期にハーバード大学大学院に在学している金子喜一なのであった。

●在米社会主義者金子喜一と知り合う

金子は、有島に先立つこと4年前の1899年、文学を学ぶべく渡米した。しかし、アメリカ社会の極端な貧富の対立と資本主義の繁栄や腐敗、墮落の実態を目の当たりにするにつれて社会主義へ傾倒し、1903年4月22日、アメリカ社会民主党に入党した。その年の9月22日、有島はハヴァーフォード大学に向かう途中立ち寄ったニューヨークで増田英一を介して金子に会っている。ただし、この時はブルックリン動物園に行ったり、写真をとったりしているだけで、さほどの親交はなかった。二人が親交を深めたのは1年後の1904年9月末から10月初旬頃だと思われる。前述のように、有島は9月29日に入学手続きを済ませている。一方、金子は万国平和会議（04/10/3-5）に出席するため9月25日にボストンを訪れたが、1、2日過ごすうちに「ボストンが何となく好きになり」そのままハーバード大学に「入学の手続きを経」ていたのである。金子のハーバードでの大学院生活は1年（04/10-05/6）足らずだったが、残念ながらこの間の記録は週刊『平民新聞』に寄稿した「ボストン便り（二）」（04/12/25）以外にはほとんど残されていない。「ボストン便り」にはハーバード大学院への聴講動機と受講科目、授業の様子などが書かれているが、有島については一切触れられていない。ただし、金子が受講した3科目のうちリプレイ教授の「労働問題」を有島も受講していたことから、二人はリプレイ教授で再会していたのではないかと推定されている。



図13 ハーバード在学時の金子喜一が住んだアパート
(49 Hawthorn Street) (2019/8/15撮影)



図14 万国平和会議が開かれたボストンTremont Temple。有島は金子と訪れて説教を聞いている。
(2020/3/21撮影)



図15 ボストン文学の中心地Old Corner Bookstoreで
有島はエンゲルスやカウツキーの書物を購入している。
(2020/3/21撮影)

●金子喜一のハーバード大学大学院「学籍簿（原簿）」

しかし有島と違って、金子が受講した科目は現在、ハーバード大学側の資料から再確認することができない状態になっている。それ故に、二人の出会いとその後の親交は有島側の資料から接近するほかになく、1985年に調査のためハーバードを訪れた故栗田博美教授はもどかしさを訴えていた。ところが、今回の派遣調査期間中に思わぬところから金子の「学籍簿（原簿）」【図16】を入手できた。その提供者は村上春樹の翻訳者として世界的にその名を知られるハーバード大学名誉教授のジェイ・ルービン先生なのである。詳細は拙稿を参照されたいが、金子の学籍簿にはこれまで不明とされてきた入学手続きを行なった日付や受講科目、所属、成績などハーバード大学時代における金子の動静を知る上で重要な基礎データが記録されている。そのような貴重な資料を提供してくださったルービン先生には心から感謝の意を表したい。

図16 金子喜一のハーバード大学大学院「学籍簿（原簿）」（ハーバード大学名誉教授ジェイ・ルービン氏提供）

●社会主義へ傾倒

この「学籍簿」によれば、金子は授業開始から2週間遅れた10月14日に入学手続きをしている。しかも、受講科目は「ボストン便り」で述べていたものと違って、後期(1905/2/13開始)に開講された「Economics 14b2(社会改造の方法)」1科目のみである。これによって、二人の出会いが有島のハーバード大学第1日目(1904/9/29)の授業「Economics 9a1(労働問題)」だと見なされていた仮説はもはや成立しない。詳細は拙論に譲り、ここで注目したいのはこの頃から有島の日記が中断されていたことだ。いわゆる「空白の3ヶ月」である。しかし、二人がすでに交流を深めていたことは、「午後例ノ如ク金子君来ル。(中略)夜金子君ト共ニボストナル社会主義者ノ集会ニ至る」(05/1/1)と再開した有島の日記に端的に示されている。つまり、金子は1905年1月1日以前に既に何度か有島を訪ね、議論を重ねていたであろうと推測される。その結果、有島は社会主義関連の新聞や書物に親しみ、社会主義者の集会にも顔を出すなど、次第にその方面に傾倒していったのである。

5) ホイトマンの愛好者ピーボディとの共同生活

有島は自分の思想のすぐれた実行家だった。それ故に社会主義を知り、関心を深めていくにつれて父からの送金によってブルジョア的生活を送っている自分に違和感を覚えずにはいられなかった。家族に送った手紙(04/12/13)には仕送り生活から決別しようと「働き口」を探していた様子が記されている。「生活改造」を目指した有島は、年明け早々に金子の紹介でフレデリック・ウィリアム・ピーボディという弁護士の家家事労働をする条件で住み込んだ。この弁護士は妻子と別居しており、時に素性の知れない女を連れ込んだりする不思議な男だったが、彼との共同生活は有島にとって「つらき様にて中々面白く勉学の外に見聞之知識を増し(中略)望外の幸福」をもたらした。中でもホイトマンの愛好者だったピーボディが、毎晩のように『草の葉』を朗読してくれたことは、その後の有島の運命を変える出来事となった。名門に育ち、伝統と厳しい戒律の中でもがいていた有島は、ホイトマンの詩に「長ク長ク遙カニ望ミシツハアリシーノオアシス」を見出し、以後生涯に涉ってホイトマン的生き方(ローファー)を追求した。



図17 ピーボディと同居(1905/1/10-6/12)したアパート(124 Oxford St.) (2019/8/20撮影)



図18 有島の運命を変えたウォルト・ホイットマン(Walter Whitman)の詩集『草の葉』(初版本Leaves of Grass, Brooklyn, New York, 1855)



図19 有島はボストンの場末の古本屋(Brattle Book Shop?)でデイビッド・マッケイ版『草葉』(1900)を購入している。(2020/3/21撮影)

6) ニューハンプシャー州グリーンランドでの労働体験

夏休みが近づいた6月12日、有島はE・S・ダニエル(Eugene Sanger Daniell)という人の農場で働くために東大法科大学出身の阿部三四と、ニューハンプシャー州ロッキングガム郡のグリーンランドに赴いた。両親宛手紙(05/5/16)によれば、有島がボストンを離れて農場で働くとしたのは「自活之道」を講じるためである。しかし、毎日の労働はきつく、朝5時半から午後2時までと夕方5時から7時半までの合計11時間も働かされるという過酷なものであった。他方、有島はポーランド系労働者のかき鳴らすバイオリンの音に詩情をそそられ、「台場の手伝ひ室の掃除など」は「慣れぬ仕事」ではあるものの「時々滑稽を演ずるも一興」と感じていることから、過酷ながらも農場の暮らしに充実感を持っていたことが窺える。後年、ダニエル農場時代を振り返った有島は、「私はそこで確かに普通の労働者だけの労働を本気でやつた。然し悲しい事には、私は弱かつた。自分の家には財産があるといふその心持を実行的に去勢する勇気がなかつた。それ故私は自分の労働で如何に油のやうな汗を流してみても、結局それは飯事に終わつてしまつた」(『リビングストーン伝』序言)と自己否定的に捉えている。しかし、この労働生活は「思想と実生活との一元化」を目指す有島にとって欠かせない体験だった。1922年7月18日、有島は自己の思想と実生活を統一させるために北海道の有島農場を小作人に開放して世間を驚かせたが、その際に小作人の境遇と心理を理解するうえでグリーンランドでの農場体験が重要な手掛かりとなったことは改めて言うまでもない。



図20 有島が働いた時の農場を充実再現したスケッチ(Exeter Newsletter, June 28, 1899)



図21 グリーンランドのダニエル農場跡(現ポーツマスカントリークラブ所有)にある石造小屋(2020/3/13撮影)



図22 ウィックス公共図書館。館長Denise Grimse氏に面会し、有島が滞在した頃のグリーンランドについて取材した。(2020/3/13撮影)

参考文献

Completed and Edited by Margaret Henderson Floyd, Bainbridge Bunting(1985) "HARVARD: An Architectural History", The Belknap Press of Harvard University Press. Anthony Mitchell Sammarco(1999) "IMAGES of America CAMBRIDGE", Arcadia Publishing. リチャード・ノートン・スミス著村田聖明・南雲純訳『ハーバードの世紀—アメリカを創った名門大学』(早川書房1990)。野村達郎『フロンティアと摩天楼 新書アメリカ合衆国史2』(講談社1989)。

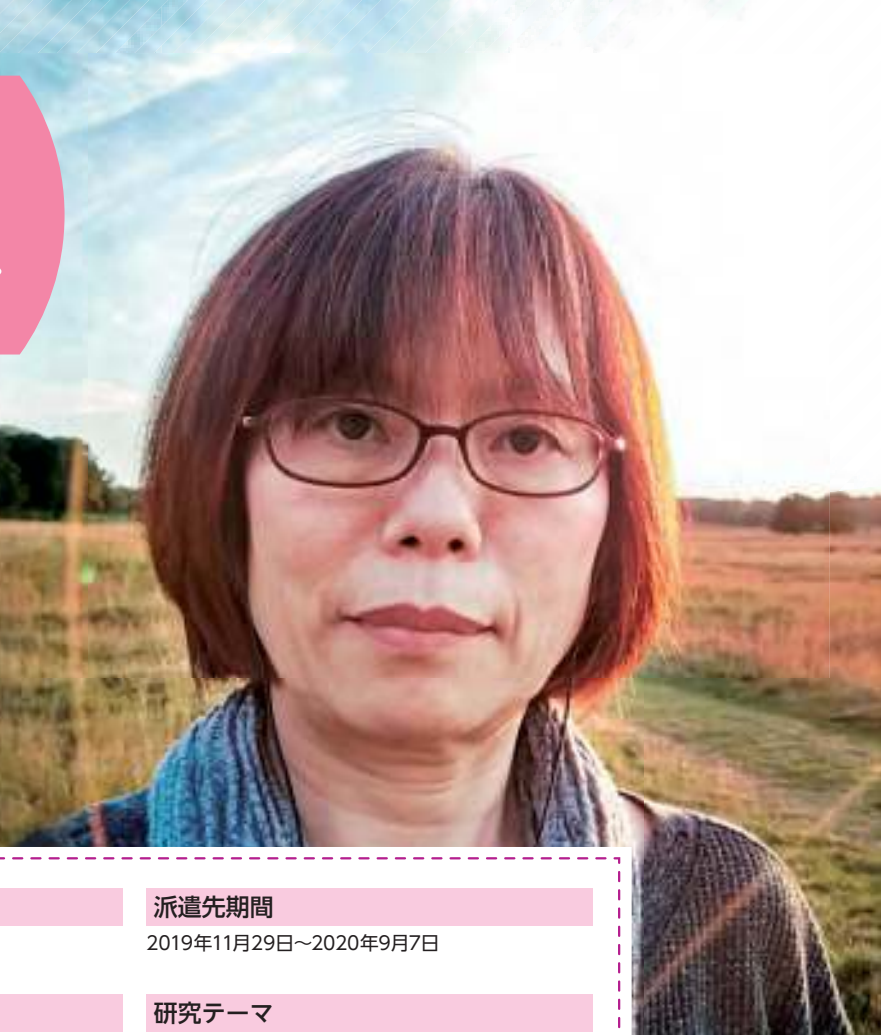
謝辞

本調査にあたっては、ジェイ・ルービンハーバード大学名誉教授から格別のご協力をいただいた。また、ハーバード大学のラドクリフ高等研究所をはじめ韓国研究所、ハーバード・イェンチン研究所、ライシャワー日本研究所、Ralph Waldo Emerson House、コロンビア大学図書館、宇都宮大学など諸機関諸氏に大変お世話になった。研究以外ではボストン米韓芸術協会Byung Kim(マサチューセッツ州立大学教授)さん、Namhi Kim Wagnerさん、Ellen P. Conantさん、Elaine Abramsさんたちにもお世話になった。この場を借りて心よりお礼申し上げたい。

長谷川万由美

はせがわ まゆみ

共同教育学部・教授



イギリス

派遣先機関

英国ローハンプトン大学

派遣先期間

2019年11月29日～2020年9月7日

住所

Roehampton Lane, SW15 5PU London.

研究テーマ

英国におけるシティズンシップ教育の現状と課題

◎ 海外派遣制度を利用してよかったこと

仕事だけでなく家事や子育ての負担が大きく、常に忙しく、いくつものことを並行で考えなければならない日常から離れて、一人でゆっくり考える時間がとれたことが一番良かった。30年ほど前に英国の大学の学部聴講生として留学したことがあり、その後10年ぐらいは英国をフィールドとして調査なども行っていたが、子どもに手がかかるようになって海外に行くことも難しく、気になりながらもそのままになってしまっていたのが、今回、いづらかアップデートできた。思った以上に30年の変化は大きく、短期滞在でカバーするのは難しいので、長期滞在してみたかった。たまたまロンドンでも自然が多い場所にあり、キャンパス内にもカモやキツネなど野生動物が住んでいるような場所だったため、自然を身近に感じながら研究に専念できた。今までこのような環境で研究できたことがなく、海外派遣ならではの経験だった。



大学近くのリッチモンドパークにて



大学内のカモの親子



大学近くのリッチモンドパーク

◎ 派遣先での苦勞

今回の滞在で苦勞したことは様々あるのだが、どんな苦勞も新型コロナウイルス感染防止のためのロックダウンの前には霞んでしまうだろう。3月初めには日本のことを心配していたのだが、3月8日あたりから急激にイギリスの状況が悪くなり、ボリス・ジョンソン首相が外出の自粛を呼びかけ始め、次に学校が休校になり、3月23日にはロックダウンが政府より発表された。3月第2週に入って、大学から、翌週の水曜日から遠隔授業、在宅勤務ができるように計画中と連絡があり、金曜日には翌週の月火を試行期間として、水曜日から遠隔授業、在宅勤務を実行に移すということが周知され、計画通り、3月18日にはキャンパス閉鎖となった。退去命令とならず、そのままキャンパス内ですごせたことは幸いだった。日本政府による各国の危険レベルが日毎に見直され、日本との航空便もなくなるかもしれないという不安の中、正確な情報がなかなか手に入らず、帰国するにも市中がどうなっているかわからない中、動くに動けず途方に暮れた。

最初には必要不可欠な業務ということで機能していた受付、清掃、図書館、ジムも、段階的に閉鎖され、3月末にはキャンパスに常駐しているのは警備ぐらいとなった。郵便仕分けのメールルームも閉鎖され、日本からの郵便物も受け取れるかわからない状況となったが、必需品の買い物、一時間程度の運動のための外出は許されていたため、急に生活に困るということにはなかった。4月以降の学校訪問やインタビューなどの予定はすべてキャンセルせざるを得なかったが、それ以上に毎日何百人も亡くなったというニュースを聞くのがつらかった。6月から段階的に行動制限が緩和されても結局滞在中に調査訪問できるようにはならなかったが、市民がどのようにこの難局に対処するかを現地で観察することが今回のテーマであるシティズンシップ教育と密接な関連があると考え、オンラインのセミナーなどに積極的に参加するようにした。

ロックダウンに比べたら、何もかもが取るに足らないことにも思えるが、それを差し引いて、通常時に英国に留学することを考えると、苦勞したのは、まずビザの取得である。現在、研究目的で大学教員が滞在するにはAcademic Visaが一般的だが、受け入れ先大学との関係で、そうでないビザが適切な場合もある。なにより、ビザの申請が民間会社に委託されており、誰も正確な情報を教えてくれないので、細心の注意が必要である。ビザの制度は一年もたたずに変更されることもあり、申請料も年々高くなっている。しかも入国予定の三ヶ月前からしか申請受付していない。ネットを検索すると英国に長期滞在する研究者がいかにもビザ取得に苦勞したかという話を見つけるのに苦勞しない。これはもう運を天にまかせるようなもので、日本の感覚は通用しないことを出国前から考えさせられることになった。さらに在英邦人が多いためか、在英日本大使館は決まりきった仕事しかしない。親身になって相談に乗るということはないので、心しておく必要があるという印象が残った。

◎ 海外派遣を通して、自身に起きた変化や気づき

滞在期間中に二度も教職員組合のストライキがあった。英国の教員の働き方を見ても、労働時間とやるべき仕事ははっきりしていて、それ以上には働かない。日本よりははるかに男女差がないと思われる英国だがそれでも受け入れ窓口となってくださった女性からは「気をつけないとすぐに仕事が入ってくるから女性は特にself-preserving (自衛) しないと」と何度も言われた。働けるだけでありたいという気持ちもある一方、労働者としての権利も守られるようにしなければ良い研究はできないとより強く考えるようになった。またロックダウン中、体力維持のために外に出て運動することは制限されていなかったため、近くの国立公園などをよく散歩していた。イギリス人の自然とのつきあい方について理解が深まるとともに、あまりにも自然になじんでしまったので、日本に戻ってから緑が少ないことに慣れずにいる。

◎ これからの目標

英国の市民性を考える上で、EU離脱や新型コロナウイルス対策といった大きな節目に英国にいたことは、大きな収穫ともいえる。このような貴重な体験をした研究者はあまりいないと思うので、この体験を研究につなげていきたい。また担当しているシティズンシップ教育に関連する授業で滞在中に得た知識などを生かしていきたい。

◎ 将来留学を考えている人へのメッセージ

長い研究人生の節目、節目に、持ち場から離れて、大局的に振り返る機会が得られるのが理想。国内でもいいが海外なら物理的にも、現在抱えている仕事から離れて、自分や研究を客観視することができるので、機会があったら躊躇なく挑戦してもらいたい。今回、このような形で、在外研究をさせていただいたことは、大変幸運だった。すべての人にそのような機会があることを願っている。

いったん海外に出してしまえば、頼れるのは自分ひとりである。もちろん日本の大学、海外の受け入れ先の多くの方々の支えがなくては実現しないのだが、様々な危機的状況に対して自分で判断しなければならないことが多くなる。単身となれば家族から離れての生活を健康的に維持する努力、つまり日常生活を普通に送るための家事などにも相当な時間とエネルギーを割く必要がある。研究ばかりでは立ち行かなくなるかもしれないので、あまり詰め込み過ぎず、現地での生活を楽しむ余裕を持てるようにしたい。

派遣先から先生へ

結果として短い期間になってしまいましたが、オフィスで一緒にすごした時間が懐かしいです。絶対にもう一度イギリスに来てください。いやもう一度来ないとだめです。そして、また研究上のいろいろなことを話しましょう。

(John Eade, ローハンプトン大学社会科学部教授・文化人類学)

英国におけるシティズンシップ教育の現状と課題

長谷川万由美(教授)
Mayumi Hasegawa
宇都宮大学 共同教育学部
mayumit@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

渡英より3ヶ月で世界規模での新型コロナウイルスパンデミックがおこり、英国は3月23日からロックダウンとなってしまった。そのため、当初の研究計画の変更を余儀なくされたことは無念である。しかし、この未曾有の災害に際して、イギリスという国、および国民がどのように対処していったかをつぶさに観察できたことは、市民性という今回の在外研究のテーマを考える上では有益であった。

2. 派遣先と派遣期間

派遣期間：令和元年11月29日～令和2年9月7日(284日間)

国・派遣先機関：英国・ローハンプトン大学社会科学部

現地の所属大学として選んだローハンプトン大学はロンドンの郊外にあり、ロンドンでは唯一のキャンパススペースユニバーシティ(大学キャンパス内に大学の主要機能が集まっており、大学寮もある)で、キャンパス内に緑も多く、落ち着いた環境で研究に専念することができた

ローハンプトン大学はホワイトランド・カレッジ、サウスランズ・カレッジ、ディグビー・ステュワート・カレッジ、フローベル・カレッジという19世紀に設立された四つのカレッジが元となっている。それぞれのカレッジは教員養成に力を入れてきた歴史があり、大学の成り立ちから英国の教員養成の歴史を学ぶことができた。

3. 研究概要

(1) 英国におけるシティズンシップ教育の現状について

英国では第二次世界大戦前よりシティズンシップ教育が重要であることが社会に認識されており、様々な取り組みが行われてきた。近年では2000年に中学校(secondary school)の必修科目として教科「市民性(citizenship)」が導入されている。しかし、同教科導入を推進した労働党政権から保守党政権に変わったことや、学校の民営化が進んだことにより、必修科目でありながら、当初のような熱意を持って各学校で取り組まれていないようである。また、イングランドで教科「市民性」を専門とした教員養成課程はかつて20大学以上あったが、現在は国内で4大学のみとなっていた。

今後、教科「市民性」はどうなっていくのか、またこの教科以外の学校におけるシティズンシップ教育のイングランドにおける現状を明らかにするため、教科「市民性」を専門とした教員養成課程を担当する教員へ聞き取り調査を行った。しかし、教育の現状を観察するため、保育所、小学校等の視察を予定していたが、ロックダウンにより実現せず、実際の授業の様子を見ることはできなかった。いずれ機会を得て、実際の教育の様子を観察してみたいと考えている。また今回は受け入れ先大学がロンドンにあったため、主にイングランドの状況について調査を行ったが、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドはそれぞれ別の教育制度をとっており、各国・地域におけるシティズンシップ教育の状況については別途、調べる必要がある。

ロックダウンで予定していた程には行けなかったが、滞在期間を通じてシティズンシップ教育や市民社会に関わりがある博物館等を訪問した。最後の一月は、週に一回2時間までという制約はあったものの大英図書館で戦間期から戦後に大きな影響力を持ったシティズンシップ教育協会の資料収集を行うことができた。

また最新の教材や教授法についての情報収集のためBETT (British Educational Training and Technology Show; ベット) 2020 (2020年1月開催)、Music & Drama Education Expo (2020年3月開催)、Childcare and Education Expo (2020年3月開催) に参加したり、ロンドンの子どもの遊びやプレイワークについて現地調査を行った。



キャンパス内のフローベル池



2018年に完成した新図書館棟



ロンドンのプレイランド (1)



ロンドンのプレイランド (2)



ロンドンの子ども専門病院



レーブンマス&エスクデール鉄道



ナショナル正義博物館(ノッティンガム)

訪問先リスト 【代表的なもの。()の添え書きがないものはすべてロンドン】

①19世紀英国の市民社会を考える場として	チャールズ・ディケンズ博物館、ファウンドリング博物館、フローレンス・ナイチンゲール博物館、ピープルズ・ストーリー(エジンバラ)
②シティズンシップ教育を行う場として	シェークスピア・グローブ、英国正義博物館(ノッティンガム)、シティ・オブ・ケイブ(ノッティンガム)、チャーチル博物館
③子どもと社会について考える場として	スコットランド・ストリート・スクール博物館(エジンバラ)、自然史博物館、V&A博物館、グレートオーモンドストリート病院、子ども博物館(エジンバラ)、市立博物館(フィンランド・ヘルシンキ)、中央図書館Oodi(フィンランド・ヘルシンキ)、国立博物館(フィンランド・ヘルシンキ)
④市民が支える社会的資本を体感する場として	レープングラス & エスクデール鉄道(カンブリア州)、ダートマス蒸気鉄道(デボン州)、スパ・ヴァレー鉄道(ケント州)

(2) フィンランドにおけるシティズンシップ教育の現状について

昨年、英国のEUからの離脱が決定したとはいえ、英国とEUとの関係は強い。今後も各分野での連携は継続していくと考えられる。そのため他国と比較することにより、英国の特異性を明らかにすることを目的として、フィンランドにおけるシティズンシップ教育の現状について2020年1月にヘルシンキを訪問して調査した。

現地ではフィンランド最大の教育展示会Educaに参加した。また、フィンランド文部省のアレンジにより、現地小学校を訪問し、フィンランドの学校運営について校長より話を伺うとともに、授業参観を行った。Educaでは2020年よりInternational Areaを設け、英語のみで終日参加できる内容を提供しており、学校訪問もその一環として海外の政府関係者、教育関係者を対象として行われた。フィンランドの教員養成は修士課程で行われており、教師であると同時に教育の研究者として教育実践に携わるという姿勢に学ぶところは多いと感じた。英国も主に学部卒を対象として大学院で教員養成が行われているが、その期間は1年間であり、研究者として養成するという側面は弱い。



左: フィンランドの小学校の教室 右: Bett(イギリス教育訓練技術展示会)でのシンポジウム

(3) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行による英国市民社会の変容について

滞在中に新型コロナウイルスによるロックダウンという市民に大きな影響を与える事態に遭遇し、はからずもこの困難な状況に対して、英国政府及び英国国民がどのように対応していくのかを観察することができた。戦後の英国福祉国家の柱の一つであるNHS(National Health Services)が新型コロナウイルスに対応する最前線となった。ロックダウンとなり、疾患を持つ人が三か月原則外出禁止となると、大々的なボランティア募集が始まり、一週間で25万人が応募したり、一市民がそれぞれ工夫をこらしたタスク(例えば家の中の階段の登り降りではエレベーターと同じ距離を登頂するとか、高齢者が歩行器を使いながらマラソンと同じ距離を歩くなど)に挑戦することで寄付金を募るということが各地で行われた。一方で、黒人や貧困階層ほど罹患率が高いといった問題が明らかになり、アメリカのBlack Lives matterに呼応する形で英国でもBlack Lives matterが大きくなるといった問題が明らかになり、今後、シティズンシップ教育を考える上で重要な示唆を得た。

また受け入れ窓口となってくれたローハンプトン大学のホスキンス教授がユネスコの委託で実施している新型コロナウイルス対策に生徒の意見が反映されたかをテーマとした調査の日本語版を実施する許可を得ることができ、現在、調査を実施中である。

4. 終わりに

新型コロナウイルスへの対応、とくに厳しい行動制限が課せられる全国的なロックダウンという想定外の出来事に遭い、当初の予定通りにはいかなかったが、そのような中でも、現地に行かなければわからない、今後の研究の糧となる資料や情報を得ることができた。学部のみならず学内の様々な方の協力や支えを得て、今回の在外研究に赴くことができたことに心より感謝申し上げたい。願わくば事態が落ち着いた後に、再び英国に赴き、授業見学などキャンセルになってしまった調査を実施したいと考えている。



ロックダウンが終わった地下鉄で (2020年7月)



エッセンシャルワーカーに感謝するフラッグが飾られているリージェント・ストリート (2020年7月)

飯塚明子

いづか あきこ

留学生・国際交流センター・助教



アメリカ

派遣先機関

Northeastern University

派遣先期間

2019年9月19日～2020年3月26日

住所

360 Huntington Avenue, Boston, MA 02115

研究テーマ

災害、災害対応、防災、コミュニティ、ソーシャル・キャピタル、NPO

◎ 海外派遣制度を利用してよかったこと

海外派遣制度を利用して最もよかったことは、研究に専念できる時間と環境を確保し、自分の専門分野を深めたり視野を広げることができたことでした。私自身、米国の大学を卒業しましたが、授業を受けて学位を取得するための学部や大学院留学と、専門分野の研究留学は大きく異なりました。世界中から集まる研究者との交流や、日本とは異なる災害被災地の状況や災害対応について学ぶことはとても新鮮で、1人1人の出会いや、毎日1分1秒がとても貴重に思えました。特にボストンは滞在先のノースイースタン大学だけではなく、ハーバード大学やボストンカレッジ、タフツ大学、MIT等の国際的な競争力の高い研究大学があり（写真1-3）、それらの大学の研究者と交流したり、セミナーやシンポジウムに参加することができ、非常に貴重な機会になりました。また、これまでの研究対象は日本やアジアの被災地が多かったのですが、今回は米国の大学を起点に、ハリケーン、洪水、火災、地震等が発生する全米の被災地でフィールド調査を行い、ネットワークができたことは、今後の研究につながる有意義な経験となりました。



写真1 セミナーで通ったハーバード大学



写真2 災害対応チームの研修で通ったボストンカレッジ



写真3 国際関係で有名なタフツ大学フレッチャースクール

◎ 派遣先での苦労

宇都宮大学に着任するまでは、アメリカ、オランダ、インド、ベトナム、スリランカ等の国に長期留学や仕事で駐在していた経験があるため、生活水準が高く、英語が通じ、多様な国籍の人が住むボストンでの生活は特に苦労を感じませんでした。あえて言うと、宇都宮と比べて家賃や生活費等、あらゆる物価が高く、最初は買い物に行っても買わずに帰ることがよくありました。また家族を日本において単身での派遣だったため、派遣準備や現地で生活をスタートするのはとてもスムーズで、到着した翌日からマサチューセッツ工科大学 (MIT) のセミナーに参加していました。一方、家族と離れて長期間生活することは想像していたよりも寂しく、最初の1週間は1人で夕食をとりながら涙が止まらなかったことを覚えています。しかし、仕事の時間は研究に集中すること、また出張のない週末は、ヨガやウォーキングをしたり、地元の食材を使った料理を作ったり、日本人の研究者交流会に参加したりすることで、少しずつホームシックを解消することができました (写真4-6)。

研究においては、自分が研究者としてどうあるべきかを考えさせられる毎日でした。トップジャーナルに定期的に名前が出ている国際的に著名な研究者との交流は、学ぶことが多くとても刺激的ですが、自分の研究力の未熟さ (特に文献収集と読解、研究手法、データ分析) を痛感し、今後の課題となりました。また研究交流や聞き取り調査のためのアポを取る際に、日本だと快諾してもらえることが多いですが、米国ではなかなかアポが取れないことが多く、(教授に紹介してもらったり、自分の履歴書を添付したり、メールではなく電話をしたり等、工夫はするのですが) 出張の前日までアポが取れなかったり、現場に行ってもアポを取る場合もありました。



写真4 ヨガスタジオの仲間



写真5 ノースイースタン大学内のファーマーズマーケット



写真6 近所の公園

◎ 海外派遣を通して、自身に起きた変化や気づき

一番大きな変化は時間の使い方です。派遣前から大学の仕事と家事や育児を両立するために、時間の使い方に気をつけていたのですが、アメリカの研究者と接する中で、どんなに忙しくても研究の時間を必ず確保することの大切さを学びました。研究時間の確保は、平日の残業や週末の時間ではなく、1日7、8時間の勤務時間から捻出します。受け入れ教員であるダニエル・アルドリッチ教授は、学生とのアポは30分、私とのアポは1時間以内の水曜日と決めていて、ゼミは2週間に1回の金曜日1時間で、いずれもランチをはさみます。また学務にかけける時間を最小限に抑え、会議は30分か1時間以内にすませます。授業を多く担当する講師 (lecturer) がいるため、アルドリッチ教授が担当する授業は学期に2つ程です。もちろんアルドリッチ教授のような研究大学の研究者はトップジャーナルの採択数等の成果を厳しく求められ、研究者がトップジャーナルや著書の数で評価されることを改めて自覚しました。日本とアメリカの大学のシステムの違いから、担当授業の数や学務の負担等は同じようにはいかず、まだ答えを模索しているところですが、私自身がどのような研究者や教育者になりたいかを再考する機会になりました。

また平日の仕事の効率を高め、最小限の時間で最大限の研究成果を出すために、仕事が終わった後や週末の時間は家族と過ごしたり、運動したり、ボランティアや教会に行ったりして、仕事のオンとオフの相乗効果ができている研究者が多く、研究者としてどうあるべきかを考えると同時に、人としてバランスの取れた生き方をしたいと思うようになりました。

◎ 将来留学を考えている人へのメッセージ

少しでも留学を考えている人は、ぜひ一歩踏み出してほしいです。初めての場合は旅行や語学留学といった形でもいいですし、大学が提供している英語研修やインターンシップ、交換留学等を利用することもできます。一歩踏み出して経験することで、その後の人生の選択肢が大きく変わってきます。私自身もそうでしたが、留学の前後で大きく成長した学生を見てきました。とは言え、留学には目的や予算、タイミング等、色々と考えることが多くあるかもしれません。私は留学生・国際交流センターに所属していますので、留学や海外経験について聞きたいことがあれば遠慮なくご相談ください!

派遣先から先生へ

飯塚先生は全米の被災地を訪問し、様々な関係機関にインタビューをして、ボストンを起点にとっても積極的に活動していました。研究発表でそのことを発表してくださり、研究室にこもっている学生にとっても大きな刺激となり、とても感謝しています。
(ダニエル・アルドリッチ教授より)

米国における災害と防災支援についての研究

飯塚明子(助教)

Akiko Iizuka (Assistant professor)

宇都宮大学 留学生・国際交流センター
iizuka@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

国内外で大規模な災害が多発している昨今、防災を視野に入れた効果的な災害対応は不可欠です。私は宇都宮大学女性教員海外派遣制度を活用し、半年間米国のボストンに滞在し、米国における災害と防災支援についての研究を行いました。具体的には米国の被災地で関係機関等から聞き取り調査を行い、米国の防災体制について学ぶとともに、コミュニティの復興や防災を導く災害対応支援のあり方について米国の事例を収集し考察することです。宇都宮大学に着任する前まで、開発途上国における被災地（ベトナム、スリランカ、イラン等）の災害復興支援に従事してきましたが、米国は経済やインフラ整備、災害の種類等、日本と環境が類似しており、本研究は今後両国の様々な地域で応用できると考えています。

2. 派遣先と派遣期間

派遣期間：2019年9月19日～2020年2月5日（140日間）、2月17日～3月26日（39日間）

国・派遣先機関：米国・ノースイースタン大学 (Northeastern University)

ノースイースタン大学は米国のマサチューセッツ州のボストン市に所在し、私は半年間招聘研究員 (Visiting scholar) として在籍しました。受け入れ教員は社会人文科学部 (College of Social Studies and Humanities) のダニエル・アルドリッチ教授で、アルドリッチ教授は2015年にパデュー大学からノースイースタン大学に移籍した政治学の教授で、これまでに査読付き論文を60本以上、著書を5冊出版し、ソーシャル・キャピタルと災害復興の研究において世界的に著名な研究者です（図1）。



図1. アルドリッチ教授（左）とノースイースタン大学で

3. 研究概要

3-1. 米国における災害復興や防災を視野に入れた災害対応のあり方についての研究

派遣期間に、アメリカの災害の被災地（カリフォルニアの火災、ニューオーリンズのハリケーン、インディアナの洪水と竜巻）を訪問し、関係者から聞き取り調査を行いました。2017年に当時全米最悪の火災となったトーマス火災が発生したカリフォルニアのベンチュラ郡で火災現場を視察し、災害時における動物の避難と避難所の運営について、現地の行政機関やNPOの関係者から聞き取り調査を行いました¹⁾。全米史上最悪の自然災害となった2005年のハリケーンカトリナ後の被災地であるニューオーリンズでは、ベトナム人コミュニティの災害対応や復旧過程に焦点を当てて聞き取り調査を行いました。インディアナ州では、2012年に発生したヘンリービルの竜巻と2015年の洪水の被災地を視察しました。

また中央政府レベルの災害対応機関である連邦緊急事態管理庁 (FEMA) Region Vと、州レベルの機関であるインディアナ州の災害対策本部、郡レベルの災害対策本部で関係者から聞き取り調査を行い、米国における中央、州、及び郡レベルの災害対応の体制とその連携について学びました。政府機関だけではなく、シカゴの米国赤十字社、Salvation Army (NPO)、パデュー大学等の災害対応において大きな役割を担うNPOや大学からも聞き取り調査を行いました（図2-7）。



図2. ベンチュラ郡の大火災で活動した動物愛護団体



図3. ハリケーンの後、生計向上を目的としてNPOが運営する農園



図4. 北イリノイ地域米国赤十字社シカゴ本部



図5. Salvation armyの配給車



図6. 郡の災害対策本部



図7. 州の災害対策本部

3-2. 米国におけるソーシャル・キャピタルと災害復興プロセスの相関性についての研究

ソーシャル・キャピタルとは、社会が共通の目的を達成するための協同行動を導く「信頼」、「規範」、「ネットワーク」のことで、ソーシャル・キャピタルと災害の相関性についての研究は近年重要度を増しており、災害が発生する前から物理的インフラや物質的な災害の備えだけでなく、地域住民の連帯意識を強くするようなソーシャル・キャピタルを高めておくことの重要性や、平常時にソーシャル・キャピタルが機能していると災害時の共助意識も高くなることがこれまでの研究で議論されています。私はこれまでに東日本大震災の被災地における復興とソーシャル・キャピタルの相関性についての研究を行っており、本研究を通してアメリカの被災地の事例を収集し検証することを目的としています。

派遣期間に、南カリフォルニア大学のShakeout(地震の防災訓練)を見学したり、サンフランシスコ市が実施しているNeighborhood Empowerment Network (NEN、近所の防災活動)の聞き取り調査や(図8)、ボストン大学が行っているCommunity Emergency Response Team (CERT、コミュニティ緊急対応チーム)の聞き取り調査や、CERTの実際の研修や防災訓練に参加したりしました(図9)²⁾。他にもボストン市地下鉄防災訓練(図10)やノースイースタン大学の危機管理の専門家からも聞き取り調査を行いました。



図8 サンフランシスコ市役所にて



図9 ボストン大学のフットボールスタジアムでの防災訓練



図10 ボストン市地下鉄防災訓練(出典: Boston Glove)

3-3. ネットワーク構築や成果発表等

ダートマス大学で開催された国際会議(2019年11月2日、New England Conference of the Association for Asian Studies)で日本の災害対応NGOについての研究発表や(図11)、サンディエゴで開催された国際会議(11月22日、Conference of Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action)で災害ボランティアについての研究発表(図12)と、ジェンダーとリーダーシップに関するパネルディスカッションの司会を務めました。受け入れ教員であるノースイースタン大学のアルドリッチ教授のゼミにも定期的に参加し、ゼミで研究報告(2020年2月28日、Research talk)を行いました(図13-15)。他にも、ノースイースタン大学、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学、ボストン大学等で行われる、災害や国際協力、日本に関係するセミナーや講演会に10数回参加し、意見交換やネットワーク構築を行いました。

派遣中はアルドリッチ教授とは定期的にお会いし、研究の視点や分析方法、参考文献等について意見交換をしたり、米国での調査方法(関係者の紹介や聞き取り調査の方法等)について適切なアドバイスをもらうことができました。帰国後の現在も、スカイプやメール等でデータ分析や論文原稿について意見交換を行いながら、アルドリッチ教授と災害ボランティアについての共著論文を執筆しています。またアルドリッチ教授が2019年に出版した東日本大震災についての本の邦訳も行い、東日本大震災から10年となる2021年に出版する予定です³⁾。このように、今回の海外派遣をきっかけに、帰国後も交流が継続し、共同研究に発展しています。



図11 ダートマス大学での研究発表と大学のシンボルである時計台の前で



図12 サンディエゴの国際会議での研究発表



図13 アルドリッチ教授のゼミの様子



図14 デンマーク出身の招聘研究員の家族と



図15 ゼミでの発表の様子

- 1) 「災害時の被災ペット対応における日米比較－仙台市とカリフォルニア州ベンチュラ郡の事例考察－」『地域安全学会東日本大震災特別論文集』No.9, 9-14, 2020.
- 2) 「地域防災における人材育成の日米比較－防災士と米国CERTの事例から－」『地域安全学会梗概集』No.46, 135-139, 2020.
- 3) 『東日本大震災の教訓－復興におけるネットワークとガバナンスの意義』ミネルヴァ書房, 2021(共訳、近刊).

4. まとめ

米国は、毎年規模は異なりますがハリケーン、大雨、洪水、竜巻、火災等の災害が各地で発生し、地震や津波、火山噴火も発生する地理的条件にあるという点で日本と類似しています。今回米国ボストンに半年間滞在し、全米各地のハリケーン、火災、トルネード、洪水の被災地で関係者と意見交換をする貴重な機会を得ることができました。米国の1人当たりのGDPは日本の1.6倍で、教育、及び収入格差は日本より大きく、政治体制や災害対応は州が基本であるため災害対応を取り巻く環境は必ずしも同じではありません。その一方で、自治体の対策や回復能力を上回るような大災害が発生した場合、自治体から州の災害対策本部と連邦緊急事態管理庁に要請、さらに大統領災害宣言を要請し、連邦政府レベルでの対応も行うという点で日本と類似しています。被災地での様々なレベルやセクターの関係者からの聞き取りを通して、各機関の役割分担や連携体制、被災者のニーズの汲み取り、災害直後の対応から次の災害への備えへの移行等、両国に共通する様々な課題があることが分かりました。またNPOやボランティアが災害後大きな役割を担い、災害対応だけではなく平常時から日本以上に活発で主体的に活動していることから学ぶべき点が多くあり、今後日本の様々な地域コミュニティで応用できる可能性があると考えます。最後はCOVID-19の発生により、予定を10日間短縮して帰国することになりましたが、ボストンを起点に現場に足を運び、多くの研究者や関係者と交流する機会を得ることができ、今後の研究や教育につながる意義のある派遣となりました。

最後になりましたが、貴重な機会を提供してくださった宇都宮大学のダイバーシティ研究環境推進本部や所属する留学生・国際交流センターをはじめとする関係者の皆様、受け入れてくださったノースイースタン大学のアルドリッチ教授や調査先の関係者の皆様、半年の派遣に快く送り出してくれた家族に心より感謝申し上げます。

金子亜美

かねこ あみ

国際学部・国際学科・助教



アメリカ

派遣先機関

カリフォルニア大学バークレー校

派遣先期間

2020年2月28日～2020年3月23日

住所

232 Kroeber Hall, Berkeley, CA 94720

研究テーマ

スペイン領南米におけるカトリック宣教の歴史語用論的研究に向けた辞書史料のコーパス構築

◎ 海外派遣制度を利用してよかったこと

米国の研究機関の環境の良さを体感することができた。インターネット利用環境やセキュリティ関係、学生や教職員の生活全般に対するサポートの充実度といったインフラの強さが印象的であった。図書館などは深夜2時ごろまで開館していることもあり、その場合でも深夜までシャトルバスがあったり学生へのエスコートサービスがあるなど、安全面に配慮が行き届いていた。新型コロナウイルス禍発生後もただちにオンライン授業へ移行するなど、緊急時の対応の早さも印象的であった。

◎ 派遣先での苦労

渡航の2月28日時点では、新型コロナウイルス禍はダイヤモンド・プリンセスが停泊した日本のほうが状況は喫緊という印象であった。米国入国も問題なく済ませたが、直ちに3月5日にカリフォルニア州が非常事態宣言を行った。カリフォルニア州は全米でも感染者が多い州となり3月10日にはバークレー校でも対面での授業が一斉に中止された。3月13日にはトランプ大統領が国家非常事態宣言を発出し、カリフォルニア州の一部の自治体では自宅隔離令が発表された。スーパーや医療機関など以外は営業を停止し、公共交通機関は減便となった。3月17日には図書館など大学のすべてのサービスが停止され研究が困難となったほか、3月22日に日本政府が米国からの入国制限の検討を発表したため、帰国を前倒しにした。

◎ 海外派遣を通して、自身に起きた変化や気づき

これまでスペイン語圏にしか長期滞在したことがなかったため、英語圏で一人で暮らすということがまずは貴重な体験だった。滞在中は、情報収集のため現地のニュースを見ることを中心にするようになった。日本にいたとくく日本語の報道にばかり目が慣れてしまうが、帰国後もこれまで以上に意識して様々な地域や言語のニュースに触れるよう気をつけている。

◎ これからの目標

今回の派遣で出会うことのできた研究者の人々だけでなく、若い大学院生の方々との交流を大切にしたい。中南米の植民地史という分野は、その学際性と国際性が特徴的である。学術的対話は多言語のプラットフォームで行われ、世界各地の研究者が共通の問題に力を合わせて取り組んでいる。そのような関係の一端を本派遣で築くことができた。

◎ 将来留学を考えている人へのメッセージ

授業や諸々の雑事から離れて研究に専念できる機会というのはなかなか得られるものではない。派遣にあたり励ましのお言葉を頂戴した国際学部の先生方には心からの感謝を申し上げたい。また、同じように派遣に出かける先生方には、くれぐれもご自身の健康と安全への配慮、変わりゆく情勢への情報収集を欠かさないようにしつつ、研究にまい進してほしいと思う。

スペイン領南米におけるカトリック宣教の歴史語 用論的研究に向けた辞書史料のコーパス構築

金子亜美(助教)
Ami Kaneko (Assistant Professor)
宇都宮大学 国際学部
kaneko.ami@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

植民地時代のスペイン領南米において、先住民のキリスト教化は一大事業であった。その一翼を担い、キリスト教化の前線を拡大していったのが諸修道会の宣教師である。報告者が研究するチキトス地方（現ボリビア東部低地）での最初の宣教活動を担ったのはカトリック系修道会のイエズス会であった。彼らは17世紀末から18世紀半ばにかけて、当地の計10箇所に先住民のための布教区を築き、周辺に散在していた多民族・多言語の先住民集団を集め、キリスト教徒としての生き方を伝えるべく定住生活を行わせた。人々はそこで「チキタノ」という一つの民族名称を名乗るキリスト教徒の集団となり、以来今日までカトリックの実践を続けている。

報告者は、17-18世紀チキトス地方で進行したキリスト教化の過程を、特にイエズス会士と先住民の協働で編纂された辞書の歴史語用論的分析から実証的に明らかにすることを目指している。この辞書は、チキト語と呼ばれる現地語とスペイン語の対応関係を示したもので、先住民言語をキリスト教神学に適した言語へと改変しようとした痕跡をとどめている。この辞書編纂の背景にある宣教の理念がいかなるものであったか、キリスト教化の相互行為において先住民が交渉を行う余地がどの程度存在したのか、キリスト教化前後で人格や関係性をめぐる土着の概念に変容は見られたのか、などについて研究を進めることが長期的な計画である。その第一段階として、膨大な史料のコーパス作成にかかわる手法および観点について、受け入れ研究者であるウィリアム・F・ハンクス教授と意見交換を行い、実際の作業を進めることが本派遣の目的であった。

2. 派遣先と派遣期間

派遣期間：令和2年2月28日～3月23日（25日間）

国・派遣先機関：アメリカ合衆国・カリフォルニア大学バークレー校

ハンクス教授の所属先であるカリフォルニア大学バークレー校は、アメリカ合衆国における文化人類学的研究の中心地のひとつである。ハンクス教授は文化人類学および言語人類学、ラテンアメリカ地域研究における著名な研究者である。メキシコのユカタン半島を中心とするマヤ語とマヤ文化に関して多数の研究業績があるほか、近年は植民地時代の先住民のキリスト教化事業における言語使用、特に「スペイン語-マヤ語辞書」を通じた言語変容に関する著作を出版するなど、報告者の研究領域について知悉している。日本国内での複数回にわたる綿密な打ち合わせの上、ハンクス教授より本派遣にかかわる受け入れ承諾を得ることができた。バークレー訪問中は複数回の面談と授業参加を認められたほか、ハンクス教授周辺の大学院生や研究者とも知己を得ることができた。

また同校の人類学科には、中南米地域の言語人類学およびフォークロアの第一人者であるチャールズ・L・ブリッグズ教授も所属している。報告者は2012年にブリッグズ教授と東京で面識があり、その際相互の研究について情報交換をしていた。本派遣ではブリッグズ教授とも再び面会の機会に恵まれ、植民地時代の辞書の研究に関して貴重な示唆を得ることができた。



図3. カリフォルニア大学バークレー校のランドマーク、サザーゲート



図4. 博物館の展示



図1. フィービー・A・ハースト人類博物館入口



図2. バークレー校のランドマーク、サザータワー

3. 研究概要

派遣中、カリフォルニア大学バークレー校の研究室および図書館を中心に、史料の分析と文献研究をおこなった。同校の学生には手厚いセキュリティ環境が整えられており、安心して勉学に励むことができる印象を受けた。また受け入れ研究者であるハンクス教授が担当する言語人類学の講義に参加することができ、改めて研究に関連のある古典的な文献を読み議論する機会に恵まれた。このような経験は、研究に没頭できる派遣という貴重な機会ならではのものではあったと考えている。

バークレー校の人類学科では、多くの月曜日に世界各地から第一線の研究者を招き、講演会を催している。本派遣では、アフリカに対する中国の医療支援についての民族誌的研究をおこなう研究者の講演を拝聴することができた。講演の前後には、軽食を囲みながらそれぞれのフィールドワーク経験についてざっくばらんに話す会も設けられ、さまざまな分野の人類学者と交流を持つことができた。

バークレー校周辺には学術書や古書を扱う書店が充実していることから、多くの重要文献を揃えることができた。長らく図書館で参照しつつも、現物をインターネットで購入することのできていなかった古書を入手することもできた。

さらに、サンフランシスコを挟んだ向かいに位置するスタンフォードを訪れる機会もあった。スタンフォード大学のセシル・グリーン図書館に、報告者がかねてより入手を希望していた植民地時代の辞書史料のマイクロフィルムが所蔵してあることがわかったためである。この史料のオリジナル版はポーランドのクラクフ図書館に所蔵されているが、一部マイクロフィルムがスタンフォード大学にあるというのである。事前に司書に連絡の上図書館を訪れたが、マイクロフィルムの保存方法が煩雑だったようで史料を見つけるのに苦労した。別の担当者をお願いして発掘してもらったマイクロフィルムは、筆者が想像していたよりもボリュームが多く、すべてを電子データで入手することができた。さらに、筆者が把握していなかったものの、同じ先住民言語の文法に関する記述を含むマイクロフィルムも所蔵されていたため、こちらについてもデータを入手することができた。思わぬ収穫にも恵まれた史料調査となった。

このように本派遣は、一ヶ月に満たない滞在であったにもかかわらず、史料の収集、閲覧、コーパス構築、分析、研究者との人脈構築といった側面においてきわめて意義深いものとなった。このような機会を提供していただいた宇都宮大学ダイバーシティ研究推進本部の皆様、不在中のご不便をお許しいただいた国際学部の皆様、そして滞在中にお世話になったカリフォルニア大学バークレー校の皆様へ心からの感謝を申し上げます。

阪本公美子

さかもと くみこ

国際学部・准教授



タンザニアにて
(杉山祐子撮影)



タンザニア

派遣先機関

タンザニア国政府科学技術局(COSTECH: Tanzania Commission for Science and Technology)、ダルエスサラーム大学

派遣先期間

令和2年2月29日～3月22日(23日間)

住所

P.O. Box 4302, Ali Hassan Mwinyi Road, Kijitonyama (Sayansi) COSTECH Building, Dar es Salaam, Tanzania

研究テーマ

タンザニアにおける社会開発と文化
～雨季の食生活と野生植物の活用に関心を当てて～

◎ 海外派遣制度を利用してよかったこと

今回、通常の夏季休業での現地調査では調査できなかった雨季に、海外派遣制度を利用してきて本当に良かったです。アフリカのサバンナ地域では、乾季には落葉樹の葉がないだけでなく、収穫期でもあり、人びとは食糧に満たされ、季節的には恵まれた生活をしています。雨季に調査することによって、食用植物を含む有用植物の葉を確認し同定できただけでなく、村人たちが生産した食糧が底尽きる時期に、どのような創意工夫をして生存を維持しているのか、その智慧に接することができました。



半乾燥地ドドマ農村における乾季の植生(2014年8月撮影)



半乾燥地ドドマ農村にて雨季に食べることができる果物(2020年3月7日撮影)

◎ 派遣先での苦労

タンザニアの雨季は、マラリアのリスクが高くなり、また雨量が多いため移動が大変難しくなります。今回、予想以上の大雨が続き、通行を予定していた大きな橋が崩落し、迂回を余儀なくされました。経済的都市ダルエスサラームと政治的首都ドドマを繋ぐ橋でもあるので、大統領の直接命令によって夜を徹して改修作業が行われていたのが印象的です。未舗装路の移動が困難になったり不通になることは予想していたのですが、今回、別の地域でも小さな橋を渡る際、川が洪水していたため、2時間近く水がひくのを待ちましたが、その間、同様に待っていた地域住民に聞き取りをしたところ、2月には6回、このような洪水があり、同様に待ったとのことでした。村から町など、急病人や出産のために病院に行くなど、急いでいる場合、困難に直面するのではないかと予想しました。また別の道中では、完全に水に水没していた家や、洪水を逃れて避難している人びとも見かけました。マラリアに関しては、やはり雨季には蚊が多く発生し、可能な限り蚊帳のあるホテルで泊まるなど、最新の注意をもって対応しました。派遣先でのこのような苦労を通して、地域住民がマラリア、場合によって洪水に毎年直面しながら、対応している苦労に思いを馳せました。

タンザニア滞在の終盤には、タンザニア初の新型コロナ患者が発生し、地方の市場でも東洋人である私に対して、「コロナ」と揶揄される場面がありました。感染症が人びとの関係を蝕み、差別を生む危険性について、心配します。



洪水で氾濫する川。手前にはバオバブの木（2020年3月撮影）

◎ 海外派遣を通して、自身に起きた変化や気づき

雨季にタンザニアで調査をするのは、2016年にサバチカルを取得し科学研究費の課題として出張したとき以来で、改めて、雨季の大変さと豊かさを同時に実感しました。特に、局地的な大雨やそれに伴う洪水は、これまで以上に被害を伴うようになり、タンザニアの人びとがますます気候変動に伴う被害に見舞われていることを目の当たりにしました。洪水のリスクに加え、マラリアのリスク、食糧不足に見舞われる雨季ですが、豊かな野生食用植物がこの時期活用されていることも確認し、改めてタンザニア農村の人びとの創意工夫を実感しました。

◎ これからの目標

このような厳しい環境にあるタンザニア農村の人びとが、野生食用植物を含む地域資源を、在来知や創意工夫をして活用しているのか、明らかにしたいと考えています。タンザニアでも近代化がすすみ環境破壊がすすむとともに、飢餓と生活習慣病が共存している状況があります。そういった中、改めて地域資源や在来知を見直すことは、文化に基づいた社会開発、内発的発展につながると考えています。具体的には、野生食用植物とその食べ方を記録したわかりやすいブックレットを作成し、タンザニアを含む社会において発表すること、野生植物がどのように人びとの健康や食糧不足に貢献できているか、明らかにするような論文を発表していきたいと考えています。

◎ 将来留学を考えている人へのメッセージ

派遣前の時期に、既に日本では新型コロナが発生していたこともあり、出発前に海外派遣制度の時期は変更できるのか、海外保険は公的に負担してもらえるのか、確認してから出発しました。前者については年度を跨ぐ変更は不可であり年度末の機会を逃すと返還するしかないこと、後者については海外派遣制度のみならず、個人教育研究費での負担も不可であることを確認しました。派遣終了後の帰国は、予定していた航空会社が運休となり、他の経路で早めの帰国となりましたが、たまたま海外派遣から帰国した時期が、ぎりぎり海外帰国者の公共交通機関使用禁止や2週間隔離の時期より前でした。しかし、これは偶然そうであったただけなので、私費でも海外保険に入っていたことは、予期しないリスクに対応するために不可欠であると感じました。組織的なリスク対策の拡大を望むとともに、将来留学を考えている方は、海外派遣制度で海外に行くときのリスク対策について、組織的な対応を期待できることとできないことについて明確に理解し、期待できないところは自らの身を守るための対策をなるべく事前にご準備されることをおすすめします。



ドドマ農村にて栄養分析用に野草採取に協力してくれた農村の女性たち (Micheal Chimosa 2020年3月撮影)

1. はじめに

アフリカのサバンナ地域では雨季と乾季が明確であり、食糧生産の面では、収穫がある乾季と異なり、雨季は食糧の在庫や現金が底をつき、病気が蔓延する時期であるとい一般的に理解されている。調査者の立場からすると、移動しやすく、マラリアのリスクも少なく、南半球の乾季は北半球の夏季休業に当たるため調査が偏重しがちであるが、乾季のみならず雨季の実態を理解することは、その地域社会を理解するためには不可欠である。更に、有用植物を積極的に活用している農村において、乾季に落葉している樹木や、生息していない草本をみるにあたり、雨季の観察は必至である。このような背景の中、これまで調査してきたタンザニアの雨季の食生活とともに、活用している有用植物の採取・同定を行い、栄養分析を行った。

2. 派遣先と派遣期間

派遣期間：令和2年2月29日～3月22日（23日間）

国・派遣先機関：タンザニア・タンザニア国政府科学技術局（COSTECH: Tanzania Commission for Science and Technology）及び

ダルエスサラーム大学

COSTECHより調査許可を得、ダルエスサラーム大学ハーバリウムにおける共同研究者 Frank M. Mgabo氏、及び科研研究協力者林将之氏とともにフィールド調査を実施した。3月2日にダルエスサラームに到着した翌日3日には、COSTECH、ダルエスサラーム大学において今回の調査の打ち合わせとともに、ロジなどを確認した。4日にはダルエスサラームからモロゴロに移動し、5日早朝には、植物学者でタンザニアの有用植物について最も出版しているChristopher K. Ruffo氏と面会した。その日は、モロゴロからドドマに直接移動する予定であったものの大雨のために橋が崩落し、モロゴロからイリンガに迂回する形でドドマに到着した。道中からミクミ国立公園及びUdzungwa山国立公園のミオンボ林や河川森林等をMbago氏の解説のもと観察した。6日～9日には、ドドマ農村Mbelezungu村及びChinangali I村において有用植物の採取・撮影・同定を行い、これまで乾季に同定できていなかった有用植物も確認することができた。またドドマにて長年活動してきた椿延子氏のチームとともに栄養分析用の野生食用植物のサンプルの採取・同定・選定を行った。10日はドドマからダルエスサラームに直行し、11日には栄養素が失われないようなるべく早く、収集した栄養分析用の野生植物を、ダルエスサラーム大学の栄養学の専門家Lilian Kaale博士の手配により、IITA（International Institute of Tropical Africa）に9栄養素について12件、TBA（Tanzania Bureau of Standard）にビタミンCとベータカロチンについて15件依頼した。12日には、ダルエスサラームからリンディに移動し、14日～17日にはリンディ州コミュニティ開発担当のAnna C. Maro氏のコーディネートのもと、Litipu森林保護区・Rutamba村・Kinyope村・Milola村、Malolo村、Kijiweni村の食用植物・有用植物の採取・撮影・同定を行い、これまで乾季に同定できていなかった有用植物も確認することができた。Kijiweni村への道中では、Dimba森林保護区においても観察をしたが、帰路には大雨に見舞われ、Dimba村からの雨水によって川が氾濫し橋が浸水したが、頻りに洪水を経験する地域住民の予測通り、森からの洪水であるため1時間後に通過することができた。雨季の食生活に関連して、収集した食用植物のカレンダーをMalolo村、Kijiweni村で聞き取りをもとに作成した。またMalolo村で実施を依頼していた雨季と乾季の食物摂取などを質問項目に含む質問票インタビュー調査（Sakamoto et al. 2021）や、小学校でパイロット実施を依頼していたアンケート調査を回収するとともに、昨年Kijiweniで実施した質問インタビュー調査に関する補足的な聞き取りも行った。

3. 研究概要

3.1 植物の観察・食用植物と同定

本現地調査では、延べ218種類の植物を、さまざまな形で観察・撮影することができ、現状において重複を除くと89種について、同定が完了している。またこれらの植物のうち、延べ121種が食用植物であり、重複を除くと41種類の同定が完了している。種のレベルまで同定できていない植物も、ほとんどの場合、科のみならず属レベルまでの同定はできている。

今回、植物の専門家であるMbago氏と林氏に同行してもらったことにより、観察時に種・属・科の名称を知ることができただけでなく、狭い調査対象である食用植物のみならず、他の植物や植生についても知識や視野を広げ、調査に対する姿勢から学ぶこともできた。

3.2 ドドマ州Chinangali I村における野生食用植物の摂取と栄養

降水量が少なく、早乾にしばしば見舞われるドドマ州のChinangali I村については、2019年8月に質問票インタビュー調査を行い、子どもの成人の健康・生計・食料摂取についての概要は把握していた（Sakamoto et al. 2020a）。本調査結果をさらに分析した結果、雨季に野生食用植物の摂取頻度が高い回答者ほど、主観的健康状況がよいことが分かり（阪本他2020a）、同様の調査を行ったイリンガ州やリンディ州と比較してもその点は顕著であった（阪本他2020b）。その原因を探るため、今回、ドドマ州で雨季に頻りに摂取される野生食用植物を中心に栄養分析を行った。

手順としては、まず3月7日に、候補となる野生食用植物を採取・同定し、食生活における利用についても確認した。栽培種も含まれていたため野生食用植物を優先し、その中でも栄養分析があまりなされていない種の栄養分析を優先した。その基準に基づき9日に、サンプルを採取するとともにその場所を撮影し、可食部を選別し、生の場合2～3kg、乾燥の場合1～1.5kg集めた。それらを換気や保冷することによって劣化を防ぎながら11日に検査機関に持ち込んだ。

表1の1, 2は、ドドマにおいて一般的にみられる同科同属の雑草であり、対象村においても調理して副食として頻りに活用されるために選択した。3～5は、同じ種の葉が、3. 生、4. 平たくまとめて乾燥された形、5. バラバラに乾燥というさまざまな形から調理され副食として活用されることから、人々の間では親しまれている副食の素材であることを理解し、形態による栄養素の違いを確認する意味でも選択した。また同属の6も比較対象として選んだ。7のバオバブの葉は若葉の場合食するが、8大木の大きな葉は食さないため、その比較を行うために選択した。9も10も、生でも調理して副食として食べるが、9の乾燥葉を中心としながら10の乾燥葉も多少加え、調理して副食として食べるため、それらを比較する意味で選択した。12は栽培種であるが、他地域よりも頻りに食されていることが顕著であるため、選択した。選ばれなかったものは、野生植物も含むが、他の地域においても一般的に食され、栄養分析が存在している可能性も高いのと、劣化がすすんでいたこともあり選ばなかった。1～12については、水分、たんぱく質、脂質、炭水化物・糖質、繊維、灰分、鉄、ナトリウム、カルシウム、ビタミンC、ベータカロチンについて測定を依頼した。ビタミンC、ベータカロチンについては、予算上追加的に3種可能であることが後に判明したため、その時点で劣化していなかった13～15を加えた。これらの調査結果を受け、栄養の専門家とともに栄養分析結果そのものについても論文としてまとめるとともに、どの野生食用植物の摂取が人びとの健康にどのような影響を与えているかも考察している（阪本他2020a, b, c）。

3.3 リンディ州Kijiweni村における食料不足と野生食用植物

リンディ州においても、食料不足に見舞われる経験があるKijiweni村を対象に、2019年8月に質問票インタビュー調査を行い、今回、不足情報に関する補足的調査を行った。乾季において未同定だった野生植物の同定に加え、それらの入手可能な季節などを調査した（表2）。

優先順位	ゴゴ語名	スワヒリ語名	英語名	日本語名	科	学名	ID#	部位	形態	野生・栽培
1	Muhiliile		Sticky purple cleome		フウチョウソウ科	<i>Cleome hirta</i>		葉	生	野生
2	Mzimwe, Magagome	Magagani, Mmagadi	Cat whiskers		フウチョウソウ科	<i>Cleome gynandra</i>	820	葉	生	野生
3	Chipali/Mapali	Matembele pori 1	Wild sweet potatoes 1	野生サツマイモ 1	ヒルガオ科	<i>Ipomoea sp. 1</i>	838	葉	生	野生
4	Chipali/Mapali	Matembele pori 1	Wild sweet potatoes 1	野生サツマイモ 1	ヒルガオ科	<i>Ipomoea sp. 1</i>	838	葉	平たく乾燥	野生
5	Sagula sagula	Matembele pori 1	Wild sweet potatoes 1	野生サツマイモ 1	ヒルガオ科	<i>Ipomoea sp. 1</i>	838	葉	乾燥	野生
6	Maweza	Matembele pori 2	Wild sweet potatoes 2	野生サツマイモ 2	ヒルガオ科	<i>Ipomoea sp. 2</i>	837	葉	生	野生
7	Ikuwi	Mbuyu	Baobab	バオバブ	パンヤ科	<i>Adansonia digitata</i>		若葉	生	野生
8		Majani ya mbuyu	Baobab	バオバブ	パンヤ科	<i>Adansonia digitata</i>		葉	生	野生
9	Ilende	Mrenda batata	False sesame	ニセゴマ	ゴマ科	<i>Ceratotheca sesamoides</i>		葉	生	野生
10	Ilumbu, Hulihuli	Matango pori	Wild cucumber	野生キュウリ	ウリ科	<i>Cucumis dipsaceus</i>	819	葉	生	野生
11	Ilende (+Ilumbu)	Mlenda	False sesame (+wild cucumber)	ニセゴマ (+野生キュウリ)	ゴマ科	<i>Ceratotheca sesamoides</i> (+ <i>Cucumis cucubiataceae</i>)		葉	乾燥	野生
12		Mamamumya	Calabash	ヒョウタン	ウリ科	<i>Lagenaria sp.</i>		種	乾燥	栽培
13	Njenje	Maboga asili	Traditional pumpkin	カボチャの在来種	ウリ科	<i>Cucurbita sp. 1</i>		果物	生	栽培
14	Njenje	Maboga asili	Traditional pumpkin	カボチャの在来種	ウリ科	<i>Cucurbita sp. 1</i>		種	乾燥	栽培
15	Lakabwajipa, Muzo	Maboga	Pumpkin	カボチャ	ウリ科	<i>Cucurbita sp. 2</i>		種	乾燥	栽培
	Lakabwajipa, Muzo	Maboga	Pumpkin	カボチャ	ウリ科	<i>Cucurbita sp. 2</i>		果物	生	栽培
	Feune	Mchicha			ヒユ科	<i>Amaranthus sp.</i>	839	葉	生	野生
	Sunga sunga	Mchungu			キク科	<i>Launaea cornuta</i>		葉	生	野生
	Lakabwajipa, Muzo	Maboga	Pumpkin	カボチャ	ウリ科	<i>Cucurbita sp. 2</i>		葉	生	栽培
	Mzole	Amarathus			アオイ科	<i>Corchorus sp.</i>	848	葉	生	野生

[illegible]

Month	No (%)	Yes (%)
1	62	38
2	76	24
3	76	24
4	64	36
5	47	53
6	37	63
7	37	63
8	37	63
9	16	84
10	16	84
11	24	76
12	33	67

Sakamoto Kumiko, Ohmori Reiko, and Tsuda Katsunori (2020a) "Health, Livelihoods, and Food Intake of Children and Adults in Central Tanzania: From Questionnaire Interviews in Chinangali I Village, Chamwino District, Dodoma Region", 『地域デザイン科学』No.7, pp.43-60.

Sakamoto Kumiko, Ohmori Reiko, Parinya Khemmarath, and Anna C. Maro (2020b) "Health, Livelihoods, and Food Intake in Coastal Southeast Tanzania: From Questionnaires Interviews in Coastal Kijiweni Village, Lindi Region", *Journal of the School of International Studies, Utsunomiya University*, no.50, pp.11-29.

Sakamoto Kumiko, Parinya Khemmarath, Anna C. Maro, and Ohmori Reiko (2021) "Health, Livelihoods, and Food Intake in Inland Southeast Tanzania: From Questionnaires Interviews in Kijiweni Village, Lindi Region", *Journal of the School of International Studies, Utsunomiya University*, no.51, pp.15-34.

阪本公美子・大森玲子・津田勝憲 (2020a) 「野生植物を食べると健康になる? タンザニア中部ドドマ州Chinangali I村における質問票調査より」アフリカ学会日本学術大会。

阪本公美子・大森玲子・津田勝憲 (2020b) 「野生食用植物の摂取頻度と健康の関係ータンザニアにおける地域比較」国際開発学会春季大会。

阪本公美子・大森玲子・津田勝憲 (2020c) 「タンザニアにおける野生食物摂取と健康の関係ー年齢・食糧不足・貧困も加味した4地域比較分析」国際開発学会全国大会。

海外派遣研究成果報告会

発表者：2019年度海外派遣者

2021年3月4日(木)、ZOOM オンラインによるライブ配信にて、海外派遣研究成果報告会を開催しました。

報告者は、2019年度海外派遣者6名、そして、特別対談として本学に来日しているJSPS 外国人研究員 Bernadett kiss 先生に「 Lund 大学 (スウェーデン) におけるダイバーシティ研究環境について」と題して報告していただきました。各々の発表から印象に残った言葉を書かせていただきました。



共同教育学部・音楽分野／准教授 平井 李枝

スペインカタルーニャで作曲された「カタルーニャの情景」他3曲を現地の映像とともに演奏していただきました。

農学部・農業経済学科／教授 西山 末真

「海外では、現場とリンクする研究、現場で役立つ研究が両立できていることに刺激を受けました」



大学の多様性



共同教育学部・教育人間科学系／教授 長谷川 万由美

「イギリスの大学における学生・教職員への支援の幅広さを感じ、大学の労働・学習環境の多様性など学ぶところが多かったです」

研究2: 米国のソーシャル・キャピタルと防災

- ・南カリフォルニア大学のShakeout(地震の防災訓練)の視察
- ・サンフランシスコ市のNeighborhood Empowerment Network (NEN、近所の防災活動)の聞き取り調査
- ・ボストン大学のCommunity Emergency Response Team (CERT、コミュニティ緊急対応チーム)の聞き取り調査と研修に参加
⇒「地域防災における人材育成の日本比較―防災士と米国CERTの事例から―」地域安全学会要旨集 46, 2020(論文)
- ・ボストン市地下鉄防災訓練に参加



ボストン大学、フットボールスタジアム
で防災訓練



ボストン市地下鉄防災訓練
出典: Boston Globe



留学生・国際交流センター／助教 飯塚 明子

「今までアジアや日本が研究対象でしたが、アメリカを起点とした調査によってネットワークができ、今後の活動の幅が広がり大変有意義でした」

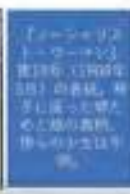
国際学部・国際学科／教授 丁 貴連

「今回、有島武郎の大学院学籍簿を図書館で見ることができた時には鳥肌が立ちました。今後この研究を進めていく自信に繋がりました」

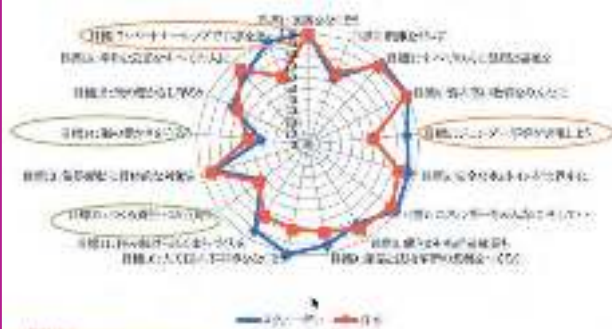


5. 金子喜一夫妻との交流

- ・1906.1.26、有島が金子夫妻の住むニューヨークのアパートを訪問し談話
↓有島の話(瀬川すゑ)を小説化。
『Ichiro's First Love Letter』(『The Progressive Woman』23号、1909.4) 資料③
- ・書籍の往復：女性をめぐる社会的問題、人種・差別・労働環境・地位・男女同権など多岐にわたり論じたもの：有島の女性解放の考え方の起源と深く関わる
- ・1908、コンガー夫人と社会主義女性雑誌『The Socialist Woman』(改題して『The Progressive Woman, The Coming Nation』)を発行
- ・1909年、結核療養のために帰国し、逗津で歿した。(資料⑤)



スウェーデンと日本のSDGs進捗度比較



国際学部・国際学科／教授 高橋 若菜

「スウェーデンで研究者のジェンダー関連インタビューを行い、ソフト・ハードの両面を備えた施策が研究者を支えていることがわかりました」

「ルンド大学におけるダイバーシティ研究環境について」

JSPS 外国人研究員 Bernadett Kiss

「労働環境は、以前から柔軟な働き方ができていたため、コロナ禍になっても特に変わることはなかった。しかし、あらゆる社会政策が整っているスウェーデンでも完全な男女平等は実現していない。その理由は、伝統的なジェンダーの考え方、会社の男性への期待が大きいこと、子育て・家事は女性の仕事だと考えられていることにあると思う」



External glamour

Non-hierarchical system
Generous working hours & work arrangements
Coffee breaks (fika)
Health promotion
Family focused mindset



Gender equality?

ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業（先端型）活動報告

はじめ～これまでの歩み～

本学は、平成24年に男女共同参画推進室を設置して以来、学内の男女共同参画意識の醸成と共に、女性研究者の仕事とライフイベントの両立支援に取り組んできました。

そして、平成25年度「文部科学省女性研究者研究環境活動支援事業」に採択され、3年間の事業に取り組んだ結果、女性教員比率の上昇につながりました。

こうした取り組みが評価され、平成30年度「文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に採択されました。

新事業の採択に伴い、組織を再編して「**ダイバーシティ研究環境推進本部**」を立ち上げました！

取り組み概要（令和5年度まで）

※平成30年度～令和2年度の中間評価をもとにまとめています。

女性教員採用の加速化

- ◆宇都宮大学教員人事方針「女性の若手教員を優先する」
- ◆公募要領への記載「業績が同等の場合は女性を優先して採用」
- ◆女性限定公募「学長戦略経費による女性教員採用特別制度」

目標1→女性教員比率21%

目標2→女性教員採用比率30%（H30～R5年度の平均）

研究力向上のための重層的支援

- ◆女性キャリアパスプログラムを更新して研究力の底上げに資する諸活動ならびにリーダーシップ向上方策を展開
- ◆その成果を女性教員の上位職への昇進というアウトカムに結実

目標3→女性教員上位職階比率の向上（教授等18%、准教授等21%）

目標4→女性教員海外派遣制度の拡充

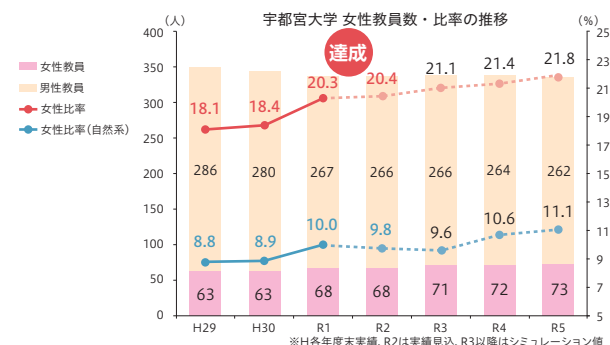
リーダー育成対策の拡充

- ◆管理職に必要な情報・スキルについて学ぶための女性教員対象リーダーシップ・プログラムの開発と実施

目標5→大学運営に関わる女性比率の向上（現状の15%の維持向上）

取組みに対する成果（現状）

目標1 女性教員比率 21%



目標2 女性教員採用比率 30%（うち自然系を半数）

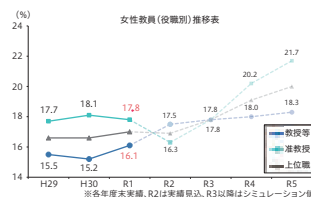
	H29	H30	R1	R2 (R3年1月1日見込み)
女性採用者数(自然科学系)	2(1)	5(1)	8(2)	4(2)
全体採用者数	12	11	13	16
女性採用比率 (%)	16.7	45.5	61.5	25.0
備考		女性教員5名のうち1名(自然科学系)は、女性教員採用特別制度による。	女性教員8名のうち6名(自然科学系2名を含む)は、一部独自の女性限定公募による。	

自然科学系
未達成
▼
要対策

令和2年度中に「**女性教員採用特別制度**」を活用し工学部で助教の採用を進めることを決定しました！

目標3

女性教員上位職階比率の向上（教授等18%、准教授等21%）

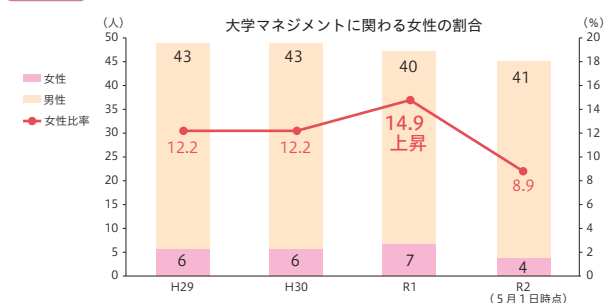


目標4

女性教員海外派遣制度の拡充

- 平成30年11月「女性研究者海外派遣制度」制定
- 海外派遣者
・平成30年度 1名
・令和元年度 10名
- 海外派遣者のうち4名が昇任

目標5 大学運営に関わる女性比率の向上（現状15%の維持向上）



宇都宮大学男女共同参画・女性研究者支援のあゆみ

ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）（2018年度～2023年度）

- 2011年 4月 「宇都宮大学男女共同参画宣言」発表
- 2012年10月 「男女共同参画推進室」設置
- 2013年 8月 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」に採択（2013年度～2015年度）
- 11月 「女性研究者キャリア支援室」設置
- 2014年 3月 「ワークライフバランス相談窓口」設置
- 4月 「研究支援補助員配置制度」、「託児支援制度」開始
- 2015年 6月 「女性教員採用特別制度」開始
- 9月 「男女共同参画週間」開始

- 2016年 1月 「メンター制度」開始
- 宇都宮市男女共同参画推進事業者「きらり賞」受賞
- 4月 本学の自主事業として女性研究者支援事業を男女共同参画推進事業として継続、託児支援制度の支援対象を職員にも拡大
- 9月 「とちぎ女性活躍応援団」運営団体・会員団体として登録
- 2018年10月 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に採択（2018年度～2023年度）
- 11月 「ダイバーシティ研究環境推進本部」設置
「女性教員海外派遣制度」開始

女性研究者海外派遣報告書 No.2

編集・発行：国立大学法人宇都宮大学

ダイバーシティ研究環境推進本部

女性リーダー育成オフィス

発行月：令和3年3月

連絡先：〒321-8505

栃木県宇都宮市峰町 350 5号館C棟3階

TEL・FAX：028-649-5151 (代表)

E-mail: gender@cc.utsunomiya-u.ac.jp

<http://diversity.utsunomiya-u.ac.jp/>

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）

